

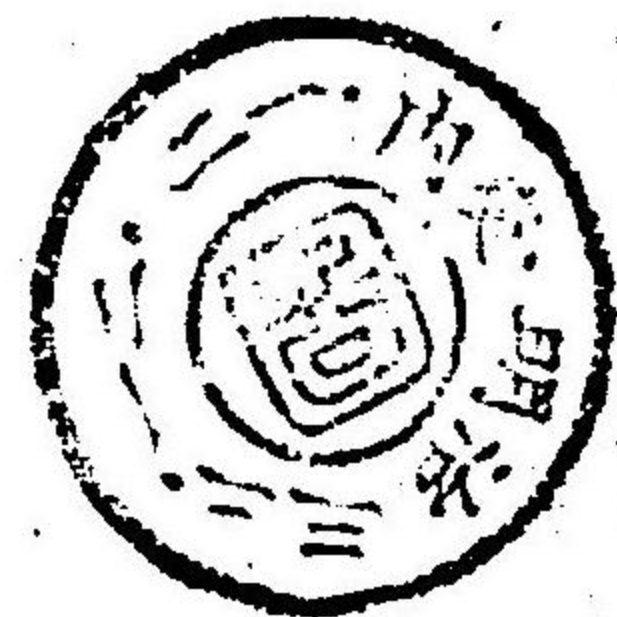


科學的宗教

完

米國哲學博士パウルケラー著  
日本文學士姊崎正治校閱

長谷川天溪譯



東京

鴻盟社藏版

September 16, 1896.

S. Hasegawa, Esq'r.

12 SUZUKICHO KANDA,

Tokyo, Japan,

Dear Sir:—

Your letter was duly received and I take pleasure in giving you my permission to translate "The Religion of Science" into Japanese, but allow me to add that this permission should not exclude others from doing the same, if they should believe that another translation might be in demand. I take pleasure in sending you a copy of The Monist, and shall send you more copies of both The Open Court and The Monist. I was informed that some one had translated articles from "The Religion of Science" in some Japanese periodical, but I do not know whether you were the translator; or whether it was some one else. In authorizing you to translate it I do wish to get any one else. In authorizing you to translate it I do not wish to get any one else into trouble.

with kind regards and best wishes, I remain,

Yours very truly,

P. Carus.

凡 例

一 予が本書を知りたるは、去る明治廿九年夏の頃、東京帝國大學教師  
哲學博士クローベル氏を訪ひたる時なりき。原著者が其著を遙々全  
博士に贈りたる者にして、予之を借りて通讀したるに、吾が今日の  
宗教界は言はずもあれ、科學研究の道に在る者を啓發する所淺少  
ならざるを發見しき。

一 輒ち一書を原著者クローラス氏に送りて、翻譯承諾の件を求めたり  
しに、著者は直に承諾の旨を返答せられたるを以て、(卷頭の英文是  
なり)予も亦反譯に着手し、日ならずして稿を脱せり。爾來書庫に納  
めて閑暇ある毎に訂正を加へつゝ、今日に至れり。

一 クローラス氏は自由研究を貴ぶの學者なり。もとは獨逸の人なれど  
自由思想を抱きたるため、遂に國を去りて合衆國に歸化しシカゴ

にオーブンコート出版會社を開きて科學哲學宗教の普及發達を計らる。著書頗る多く、就中『佛陀の福音』『哲學初歩』『根本問題』等は歐米人間に稱へらるゝ者なり。其他年四回刊行の『モニスト』及び月刊『オーブンコート』の二雜誌を發刊せらる。

一 予が反譯したるは、ケラス氏の思想を尤も好く而も簡單に代表して剩す所なき『科學的宗教』なり。此書原名を『The Religion of Science』云ひ、科學の神聖なるを説き、且つ所謂宗教家の迷妄を破りたる者也。

一 本書の表題に就きては初め原文を離れて『宗教新論』と譯したれど是れ未だ本書の内容を代表するに足らざるのみならず、全一の名目既に世に在るが故に、改めて『科學の宗教』となせり。去れど此名目も亦誤解を生ずるの恐あるが故に、再び更めて『科學的宗教』となしぬ。固より Scientifico の意味と同一視したるに非ず。只一時の便を思

ふて稍や原意に近き者を選びたるのみ。但し其差別は讀書是を通讀して知らるべければ、茲に贅せず。

一 原文は簡練高潔にして冗文なし。而して予や文に爛はず、或は原文の尊嚴を傷けたるものもあらん。讀者譯文を看て原文を推測するなからんことを希ふ。

一 予は原意の失はれざらんことを第一の要點とせり。而して譯字の多くは文學博士井上哲次郎氏が『哲學字彙』に依りたれど、又自ら造語せる者もありて此他は一般の用法に従へり。

一 附録として卷末に加へたるは、千八百九十三年九月十九日シカゴ府に開會せられたる萬國宗教大會に於てケラス氏が演說せられたる者にして、科學と宗教とは衝突すべきものに非ず、宗教は科學的研究に依りて進むべく、科學は即ち宗教的天啓なるを説けり。去れば本書の大意を摺撫せむとする者にとりて便宜あるべきを

思ひて譯出せり。其原名を Science a Religious revelation といふ。  
 一 來馬琢道君は本書出版の爲に幹旋の勞を取られたり。茲に記して  
 感謝の意を表す。

明治三十二年十月

譯者 長谷川天溪

しるす

原 序

オーブノート出版會社の事業たる、専ら理論上の事柄にのみ重を置  
 くが如しと雖も、而も尙實行上の目的を遂行せむとす。約言すれば、科學  
 的宗教を建て、之を進歩せしめむとするに在り。

此小冊子は、科學的宗教を紹介し、以て從來の誤解を破り、且つ此宗教の  
 原理及び範圍を明示せんが爲の一小引なりとも謂つべきなり。

科學的宗教を建つるには、強ち從來の宗教を棄つるを要せず、只其等を  
 洗滌して其の高きに達せんとする可能性を發達せしめ、其の神話的な  
 る所を嚴密なる科學的概念に換ふれば可なり。故に眞實にして善良な  
 る宗教は其何たるを問はず、之を保存し、只迷信或は不條理なる分子を  
 のみ艾除し、且つ其誤謬を排斥す。

現今の教會が執れる政略を看るに、進んで思索せんとする者を抑壓す、されば科學者或は哲學者は、吾人が茲に從來の宗教を擴張して、自然界に見出さるゝ唯一の天啓、且つ科學的證明を経たる眞理に基礎を置かんずる宗教思想、即ち科學的宗教を發達せしめむとするを見て、或は有望ならむと謂ふなるべし、されど此事業たる一見すれば望なきが如きも、其實相に於ては然らむ。現今の教會、殊に亞米利加教會の如きは、其教理が指示するが如くに保守靜止主義に非ず。此二十年間に吾等の教會は頗る深遠に且つ寛宏と移り來りぬ。而して其中には、宗派など云ふ狹隘なる範圍及び教理上の信仰を離脱せむとするの傾向あり。如何なる處に於ても、宗教的生命に、科學の影響する有り、而して其窮極の目的は、前途なほ遼遠なりと雖も、理性的の宗教上の信仰を立て、且つ宗派的信仰を擴げて世界的となさむとするに在り。是ぞ眞正且つ寛公なる信仰にして、即ち眞理の宗教なり、科學的眞理の宗教なり、科學的宗教なり。

吾人は一方に於て宗教上の熱誠の度を、哲學及び科學の領内に移し、他方に於ては、不撓不屈の批判的且つ科學的研究の精神を宗教上の信仰の範圍に應用すべきなり。  
科學とは天啓の別名なるを學ばざる可らず。

科學的宗教は全人類に訴ふる者なり。教會に屬すると否とを問はず、眞理を愛する諸の人に訴ふ。

ルイテル曾て曰はく『國中の最悪なる偶像は、聖檀と祭禮となり』と。此言たる今尙用ゐて穩當なり。科學的宗教は吾等教會の偶像及び鄙教的鬼神を打破せんとす、蓋し宗教と科學とが衝突する所以は此偶像及鄙教的精神あるが故なり。

『科學的宗教』なる名は、教會と分離するを意味する者に非ず。教會の信仰及び道德上の精神に於ては、基督教に反する所なし、されど獨斷的にして儀式に重を置き、且つ鄙教的部分を排斥す。乃ち此原理を明示せむと欲して而して此名を附せり。

科學的宗教は從來存在せし各宗派に對峙しての新教なりといふ意を以て建てられたる者に非ざるなり。去れば此宗教には、規律、細則、信條などありて且つ一定員を有するが如き教會あるに非ず。此宗教には、不可見なる教會ありて、其人員とは吾輩と等しく、真理の宗教を奉じ、且つ真理なる者は、一回毎に示現するのみならず、吾人は常に真現の默示に面するを悟り、加ふるに真理の科學的研究は、宗教上の事柄に用ゐべきを知りたる人々なり。

科學的宗教の原理を揚言する人々は、教會に屬するも屬せざるも可なり。差別を滅せずして、基督教徒と云ふも、或は猶太教或は自由信教なりと謂ふも何等の妨なし。科學的宗教信徒の一致する所は、共通の儀式禮式などに在るに非ず、否、真理を研究し、真理に信依し、真理に據りて生活せんとする共通の目的を以て信仰上一致するのみなり。去りて此不可見教會の團隊は決して架空の幻像にあらざるなり。

此不可見教會には、孔夫子、ザラス、トラ、モーゼス、佛陀、基督を始として、其他有ゆる預言者、聖賢、真理發見者、發明家、人類の先導者、學者及び偉人業皆附屬す而して心の貧しき者、柔和なる者、賤しき者、心の賜を欲する者も亦之に屬す。思想界及び事業上の英傑にて進歩の爲め且つ理想を現實せんが爲め、大に苦心して此心の賜物を得たるなれ。

科學的宗教の思想は、怡も天文學が占星術より脱化し、化學が鍊金術より發達したるが如く、充分發達し得べき筈の物にて、毫末も奇怪なる事なし。何となれば古き教理的宗教より自然界の事實に基礎を置ける宗

教の發達するは前記の學問進歩と全く同様の場合なればなり。  
 宗教は自然に發達す。現今の宗教を奉ずる者曰はく、吾が宗教は超自然  
 的天啓より出でたる者なりと。去れど然らず其等宗教は其宗教建設時  
 代の科學に建言せる者に外ならず。吾等の宗教は現今に於て最良正確、  
 最も圓熟したる知識を含有せざるべからざるは明かなり。  
 科學的宗教は今は荒野に宣傳へらるゝ呼び聲のみなり。されど人の心  
 中より湧出せる者にして決して壓倒せられざるなり。縱令今は用ゐら  
 れざるも後進者之を傳へて止まざれば、其謂ふ所は人の聽く所となり  
 且つ人之を遵奉するに至るべし。  
 吾等は目的の近々に達せられんを希はず、去れど吾人は信ず、吾等の理  
 想は確實にして、後代には宗教的見解の進化と共に吾人の願望も亦到  
 達せらるべきとを。

千八百九十三年

シカゴに於て

ポールケーラス識す



# 科學的宗教目次

緒 言	一
第一 原理信仰及教理	四
第二 行爲の憑據	一八
第三 科學的宗教の倫理	二七
第四 靈魂	三六
第五 不滅	四九
第六 神話と宗教	六六
第七 基督と基督教徒二者の對比	七八
第八 宗教精神の神聖	一〇一
附錄 宗教的天啓としての科學	一

真理を隱家として固く是を保て

(佛 陀)

吾が民は知識なきによりて亡ぼさる爾知識を棄つるによりて我も亦汝を棄てわが祭司たらしめよ汝おのが神の律法を忘るゝにより我も爾の子等を忘れん

(何西阿書第四章六節)

# 科 學 的 宗 教

米 國 ポ ー ル ケ ー ラ ス 著

文 學 士 姉 崎 正 治 閱

長 谷 川 誠 也 譯

## 緒 言

吾人は現世に、生活力を有し、感覺を備へ、且つ思考力を有する者として生れ來れり、去れど其生命を保つは、實に暫時にして、臚ては死滅し去るなり。

敢て問はむ、所謂人生とは何ぞや、夫れ吾等人類の日月を見るの間は、或は勞働し、或は身心を惱め、或は期望し、或は徒らに願望し、或は利を得んと欲して業を爲す、去れど歡喜は過ぎ易くして殘る所却て悲哀絶望の

科 學 的 宗 教

濁滓なるあり、豫期する所の現實せらるゝは僅少のみ、願望する所の満  
 さるゝは寸毫のみ、噫、勞働すと雖も成功する所果して幾許ぞや。  
 思ひめぐらせば、誠や人生は轉變の現象のみ、其範圍たる狹隘、其年月た  
 る瞬時、而も成功を看んと欲するも、悲むべし能力に界限あり、然らば吾  
 人の目的とし、はた希望する所果して何物ぞや。  
 吾人の満足を得むとする所、唯に夫れ人生の娛樂より來る一滴の快意  
 に在るか、吾人の目的とする所、皆にそれ生存し、快樂を得て、やがて死滅  
 し去るに在る乎、遮莫、一たび瞑目せば、萬象亦消滅して、我等の曾て生活  
 し快樂を得ざりしが如きにあらずや。  
 吾人の艱難に陥るや、必ず補佐を求め、解け難き煩悶苦惱の裡に彷徨す  
 るや、必ず撫慰の有らんを願ひ、榮枯盛衰の内に沈淪するや、必ず守護の  
 來らむを庶幾ふ。遮莫、何物か此等補佐たり、撫慰たり、守護たる者ぞ、知ら  
 ずや吾人のめぐり遇ふ補佐者は即ち宗教其物たるを。

科 學 的 宗 教

如何にしてか、吾人は、我れ自身及び此人類の棲息する世界に關する知  
 識を捕へ得べきか。如何にしてか宗教を捉ふべきか。  
 それ知識を積まんと欲すれば、吾等は先づ尋問せざる可からず、然り、諸  
 般の事柄を點檢し、而して苟くも善しと認識したる事あらば、必ず之を  
 確執せざるべからず。ナザレのイエスは曰く『尋ねよ、然らば爾は見出す  
 べし』と、宜なるかな言や。  
 我等を補佐し、我等を守護する宗教を確執せむと欲して取るべき方法  
 は人生の別方面に於て使用せられ、且つ科學なる名に由て知らるゝも  
 のと同一ならざるべからず、さればこそ今吾人の覓むる宗教を名づけ  
 て、科學的宗教とは謂ふなれ。

## 第一 原理信仰及教理

宗教とは何ぞや。

宗教とは何れも一の確信なり、否確信せらるべき筈の者なり、其確信や人の行爲を規定し、悲哀の中に撫慰を與へ且つ人生の有ゆる目的を清浄無垢たらしむるものなり。此ぞ宗教の宗教たる所以なる。科學とは何ぞや。

科學とは一定の方法を用ゐて眞理を探究するものなり、其眞理たる正確、圓滿、不變化にして、事實の有ゆる開陳を總持す。科學的宗教とは何ぞや。

科學的宗教を奉ずる人は、能く倚賴するに足るべく、且つ眞の科學的方法に依頼して眞理を搜索し、之を發見せんと欲す。是即ち此宗教の特色なり。

夫れ然り、科學的宗教は、窮極の眞理として科學的に證明せられたる眞理の定説を承認す。されど縱令ひ一定説ありて、或る超人間的根據より來りたる特殊の默示なりと矯託するも、此宗教は斯る曖昧なる定説を取らざるなり。

科學的宗教は、決して特殊の默示の如き者を採らざるも、尙確然たる原理ありて存す。又宗義的信仰を許さざるも、尙明説せられたる信仰を有てり。加之特有なる禮儀の規繩を與へざるも、尙一定の教理を提出し、且つ宗教的倫理の律條を定むるあり。然らば科學的宗教の原理とは如何。

第一に眞理を探究し、第二に眞理を承認し、第三に非眞理を排斥し、第四に眞理に信依し、第五に眞理に歸依して生活す。

宗教的及び科學的眞理の間に於て相異なる所あるか。曰はく何等の差異あること無し。從來の僧侶、或は又科學者も絶えて口にせしとあらずと

雖も、吾人は科學を以て神聖のものと認む。科學的眞理たる、決して瀆聖のものに非ず。否、神聖なり。

宗教的眞理と、科學的眞理との如く、二個の相容れざる眞理あるべくもあらず、眞理固より一なり。吾人は此唯一なる眞理を科學的方法に依りて發見し、而して之を吾等の宗教的生命に應用すべきなり。

眞理は唯一にして此眞理の認識は、不僞不妄の宗教の基礎を成す者也。』  
信條及宗義とは何ぞや。

## 科學的宗教

論證なきに徒に提議し、且つ科學的光明に對すれば、何等の價值だに無きものと雖も、信ずべしとあれば之を承認するが如きは、之れ教會に於て謂ふ所の信條或は宗義なり。

既に記したるが如く、科學的宗教の原理には所謂教理的信仰を許さざるものなりと雖も、又信仰なる者を没したるにあらざるなり。  
信仰とは他なし、唯眞理に歸依するに在り。

## 科學的宗教

所謂信仰と、所謂教理的信條との差異を言はんは、前者即ち吾等の所謂信仰は道德的態度を有し、後者即ち信條は唯信ぜよと云ふのみなり、即ち信條に於ける信仰は、無論證なる記載に満足を表するのみにして、此科學的宗教に於ける信仰とは、眞理は發見せらるべく、又其眞理こそ唯一の濟度者たるを確信するに在り。

現今の宗教界に於ける或宣教師の如きは宗教上の教理を研究するを禁じ、剩へ信仰上の事柄に理性より發する質問を提出せむとするを許さずとの規律を定むと云ふ。是等は誠に盲目的信仰なりと稱すべし。  
科學的宗教は、斯る盲目的信仰を指して非宗教なり不道德なりとす。吾人は斯る底の信仰を排斥す。實に誠に、人間生涯中に生起する諸の問題を討究すること我等の義務なれ。科學的宗教は是點を人に教ふるなり。去りて。此宗教は、無頓着主義を唱ふるに非らざるなり。夫れ然り、各個人の好む所に任せて、敢て其人の信仰或は行爲に間然せざるが如き寛

大なる主義を執るものにもあらず。否此宗教に於ては頗る嚴明なる教理こそあれ。

由來無頓着主義なる者は過去の歴史上に於て其流行せる跡を今日に貼せり、而して現時と雖も、或一流の人々は此主義を奉じて、したり顔なれど、眞理を重んずる人にとりては誠に厭ふべきの事共なり。

吾人は斯る無頓着主義を好まず、吾人は正實なる信仰を欲す、然らざれば正實に不信仰ならんを欲するなり。其中間に懸りて、半ば宗教的なる心を以て、無關係を主とするが如きは愚なり、斯る愚愾に迷はざらむこそ望ましけれ。始にして終なる人言へるあり。

『我れ爾が冷かにもあらず熱もあらざるを爾の行爲によりて知れり我れなんぢらが冷なるか、或は熱からん事を願ふ。爾すでに温然くしし冷かにもあらず、熱くもあらず、是故に我れなんぢを我が口より吐き出さんとす』(黙示録三章十五、十六節)

羅馬教會の自ら持する所、即ち科學的宗教なり、此の故に科學的宗教なる者は中々に聖教的又正統的宗教なり。

さもあらばあれ、吾人は今日識られたる眞理を以て圓滿完了せるものなりと言ふにあらず。否決して之を揚言する能はじ、抑も宇宙間の問題たる、實に無盡藏にして、吾人の識りし所の如き、若し其と比較しなば頗る微少なる光明を放つのみ。去れど吾人は知る、漸々研究を積みなば何時しか眞理を認め得るを。

念ふに眞理研究の事たる、皆に科學上の必要なるのみならず、尙又宗教上の義務なり。其眞理研究の精神なくして、徒に信仰するが如きは、其奉事する所は如何に忠實なりとも、之を正當なりと謂ふ可からざるなり。科學的宗教は宗義を排斥すると共に一個の教理を有ち、尙其信仰も亦實質ざきに非ざるなり。

然らば何物か是れ信仰すべき教理の淵源なる。

科學的宗教の教理は實驗の結果なり。其經驗たる、唯一個人にのみ限るに非ずして、普く一般種族の經驗を云ふ。

かるが故に其教理たる、必ず證明せらるべきなり、而して又批評せられ、訂正せらるべきの責任を帯ぶるものとす。

科學的宗教は禮拜或は儀式等に関して何の態度を有するか。

從來組織せられたる宗教は、大多數までは、宗教的生命として聖禮、禮拜祭式などを用ゐたり。されど要するに此等は宗教上の教理を譬喩的に傳へ、且つ上帝と人間との間に在りて、見るべからざる精靈上の關係を、見得べき形式符合によりて示さむとて結構せられたる者に外ならず。洗禮の如き懺悔の如き、其他聖會結婚などは皆斯くの如き儀式なり。科學的宗教に於ても宗教上の事柄を價值あり且適切なる方便によりて現さむ爲には、或は適當なる形式の必要あるを否定せず。實に其儀式のものたる、生命を清潔ならしむる一の方便にして、且つ生活上最要なる

事柄なればなり。されど其形式符合たる者は、最も適切に其思想を現はさざるべからず、而して思想は又眞實たるべし。

科學的宗教は形式其物に何等の價值を與へざるも、其れ等の意味する所に眞正の價值を附するなり。彼の印度人が魔法家の魔術を解するが如くに、此等表象を思惟する勿れ。此等表象の中に含まれたる意義を去りては、其表象なる者は意味もなく功德もなし。はた魔力のあるにあらざ。科學的宗教は此等儀式に関して敢て反對を述ぶる者にあらねど、之をして宗教にのみ限れる特種の形式なりと謂はず、はた世を救ふに當りて缺く可らざる條件なりと見做すに非ず。

此宗教の教理如何。

(一)科學的宗教は、其重要なる教理の一つとして提議する所あり、曰く如何なる行爲と雖も、其性質に従うて、必ず善か或は惡かの應報あること決して免る可からず。

(二) 科學的宗教は從來組織せられたる諸ての宗教中に、相一致する所ある道德上の訓戒を確實なりと教ふ。

(三) 善なる物及び悪なるものは科學的研究によりて識別せらるべきなり。

(四) 科學的宗教は科學上の定言を採用す。

斯く科學説を容るゝと雖も、其意決して全科學者の説を無差別に採用するに非ず。其取るべき物と言ふは、理性上の論によりて證明せられ、經驗に依りて確實とせられ、又若し出來得べくんば試験によりて確實と承認せられたる説を指して言ふなり。

科學的宗教に於ける科學者の位置如何。

科學者は眞理討究者なるを以て、科學的宗教の豫言者なりと謂つべし、豫言者又は僧侶が權利を有する所以は、唯道德的行爲の定理を代表するといふ其一點に在り。故に彼等自身には何等の權利もあるとなし。さ

れば縦令如何なる缺點過失が豫言者又は僧侶に在りとするも、此等の事は忠實なる信仰者が宗教に信依する點に何等の影響をも與へざるなり。

科學的宗教に於ても亦然り。科學者の權利を有すとは、其眞理を討究して之を發見し且つ之を證明する其一點に在るなり。故に彼等自身に於ては何等の權利もあることなし。且つ科學者は兎角誤謬に陥り易きものなれど、其誤謬の如何に拘らず、科學及科學の定説は毫も影響を蒙るものにあらず。

科學的宗教は科學の定説にこそ基け、決して科學者の言ふ所に基礎を定むるにあらず。而して其科學たる強ちに自然界の學問にのみ限らるゝにあらず。此他尙社會學及び倫理學をも含めり。又科學者を眞理の豫言者とし見れば、彼等は道德の説教師にとりては缺く可からざる補助者なり。されど其處に注意すべきは、科學者も又説教師も、吾等人類の如



く同じく人間にして、いつしか死する者なると共に、亦誤謬に陥り易き者なる事是なり。

僧侶にして往々宗教上の徳義を缺くものあるが如く、科學者中にも、科學的に建てられたる倫理に背くことあるへし。

科學者は羅馬法王にこそ反對すれ、尙大多數は自からを、真理の完全なる代表者なりと許して尊大なり。彼等の論辯のさまたる常に驕傲、頑固、偏執なり。瑣少の事に言論を逞うし、而も虚飾を事とするに至つては、嗚呼是を何とか謂はむ。されど幸にして去る傍若無人の科學者と異りたる例外の士君子あり。よし斯る例外の士君子なくして全科學者皆缺點に満つと雖も、科學其物の實質は寸分たりとも損毀せらる所なく依然として立脚す。

發見せんとする真理に關しては、科學者中常に種々の異論あるは、吾等の心得置く可き事共なり。されど此事たる、真理發見せられて明晰に陳

述せらるべしといふ事實と毫も矛盾する者にあらず。今假りに或る二三の問題の決定せられて、茲に新問題の生起するありとせんか。即ち曩の問題の終結は、科學的真理として承認せらるべきなり。而して又斯る真理は其問題研究に専心勞を取りし人々の凡て同意を表する所なり。偕て今起りたる新問題は、まことに之れ真理追索家間の討論問題にして其異議紛々たる所、却て真理發見に重要な方便なりと謂ふべし。

吾人と真理との關係如何。

真理とは事實及其存在の法則の正確なる開陳なり。而して真理は、吾人より離れて獨立するの力を有す。

正確なる真理が果して吾人の斯くあれかしと願ひし者なるや否やは、今論すべき問題にあらず。今は唯真理と吾人との關係を言はんのみ。吾人は固より真理を變更し或は製造するを得ざるなり。真理既に變更する能はず、故に吾人は唯々諸々之を承認し、之に従うて吾等の生活を左



## 第二 行爲の憑據

科學的宗教に於ては吾人の行爲動作に關する憑據ありや否や。吾人は如何にして之を知り得るか。又其性質如何ぞや。

眞理とは事實の正しき開陳なり、但し其の開陳たる、管に事實を記載するのみならず、あらゆる事實の彼我連絡ある點を明かにするにあり、又吾人が此等事實の開陳を見るや、一つ場合に用ゐべき規律は又其他の場合にも適合し得べき規律をも見得べき様ならざる可らず。普通の語を以て簡單に云へば、吾等は事實の何が故に、はた如何なる理由ありて然るかの疑を解き得る様ならざる可らず。従うて眞理とは永遠てふ方面の下に存在する物の記載なり。吾人の事實を見るは其中に不滅の點を發見せむが爲なり、されば若し事實の事實たる法則を見んと欲すれば吾等深く測りて不變永遠の物を握らざる可らず、尙現在に於ても、は

た如何なる他の場合に於ても決して變らざる所まで研鑽せざる可からず。吾人は吾等の經驗中に觸るゝ所のあらゆる物體を、或は造り、或は損毀するを得。されど事實には特種の性ありて、吾人は之を記録するに永遠不朽不變化なる法則を以てす。即ち其特種の性あればこそ斯る法則の打ち立てらるゝなれ。且つ此物の状態たる如何なる場合なりとも其性を依然として變ぜざるべく、又吾人の支配の下にありて左右せられざるべし。吾等は是を變ぜんとするも能はず、はた造る能はず、此物はあるまゝの物なり。吾人は今現に事業をなすと、はた、期望するにと拘らず、常に心に此物を思ふべし。

此等事實の不可思議なる點、即ち吾人の所謂法則は世界を創り、人を造り、はた、人間の道德的理想をも作りぬ。加之、今尙ほ宇宙の運命を司り、來らむとする時代の運命をも定むべし。其性たる固より永遠不朽なり。今此論を以て、自然を人性化して自然の法則を考ふれば、自然界の性を作

るものとして語り得るなり。  
若し實相の此特質を思ひ廻らせば、吾人は其の莊大なるに驚かざるを得ず。されば自然の法則は全く神秘的のものにあらで、誰人も容易に之を理解し得べし。

科學は歩一步吾人に教ふ、此等の法則は凡て好く調和したる法則の一組織を作るとを。此等法則は皆規則正しく貫徹したる系統をなす。故に吾人の或る特種の法則を見るや、之を以て全稱的法則の應用なりと成さむとす、而して何が故に彼等の斯くありて其他、寸分も異なる可らざる乎を學ばむとす。

若し科學にして圓滿ならん乎、或は又遍通の位置に達せられたるものならん乎。有の諸法則が玻璃の如く明瞭なること吾人の聊かも疑を容れざる所なり。縦合ひ如何に複雑なる場合にありと雖も、其明かなること恰も *Newton* の自明なるが如くなるべし。而して凡て貫徹せる組織の

如何に簡單明白なるかを見るならむ。

されど此真相は簡單なるも、之より出で來る結果は實に奇に異を重さねて廣大無限なり。一目誠に是れ千狀萬態、而も亂雜不調和なり。其法則たるや堅牢、而もよく自由にあらゆる可成的變化をなす。實にや其の狀態の變化たる、常に急激、而も之を拒むべくもあらず。

永遠に存在する物こそ實に吾人行爲の窮極の憑據なれ。斯る物を從來の宗教にては神と名む呼びける。

社會的活物の進化は、尙自然の各の事柄が法則に従つて行くが如し、而して此活物の法則を名づけて自然の道德法則と云ふ。此法則たるは又他の法則の如く嚴にして廢弛すべくもあらず。將た之と争ふべくもあらず。此法を守つて謹慎なる者には幸福來り、之を破つて無法なる者には災害あり。是れ皆此法則の然らしむる所、遁れんとするも、詎んぞ能ふべけんや。

凡て宗教上の命令は、道德の法則に従ひて生活すべき道を人間に示したる人事の規律なり。其宗教的命令の定言は窮極のものに非ざるも道德法則の基本は終極のものたり。凡ての宗教的命令或は訓誡は自然の道德法則より出で来るものなり。故に其命する所にして法則に慚ひなば之れを正當なりと謂ひ得、然らざれば一切不正なりと謂ふべきなり。行爲所作の標準は即ち實相なり、而して其の實相の存在は、科學的研究に因りて證明し得らるべきなり。其自然の道德法則の存在の争ふ可からざるは、猶引力の存在に於けるが如く、其確實堅固なる、猶ほ數學の論證の如し。

科學は神に關して何と云ふか謂ふ。

科學に於ては神を語らず、否之を言ふの必要を認めず、是れ科學には宗教上の語と異りたる名稱を使用すればなり。加之科學は總括に於ける

自然の永遠なる點を討究せずして専ら自然の差別の排列を研究す。而して其研究したる結果を抽象的に自然の法則と呼ばれたる規律を以て表現す。

科學は神を語らずと雖も尙神を教ふ、いかにとなれば、自然の各法則は皆神の一部分なればなり、かるが故に自然の各法則は其範圍内に於て行爲の憑據なり。尙又一法則ありて若し吾人が進んで吾れ自身を之に適はしめむとせんに、其時こそ此法則は吾人の欠乏を補ふ能力なれ。換言せんに斯る法則は吾人に附隨して吾人の願望を満す物ならで、獨立獨行の者なり、而して吾人の之を犯すや、復罪なき能はざるなり。佛教は唯一の例外なれど其の他あらゆる宗教は皆行爲の窮極の憑據として神を立てたり、而して之れを代表するに人躰に似たる偶像を以てしぬ。

思ふに宗教上の有神論は殆んど皆神人同形説ならざるはなし。

今次に神に關する種々の見解を列記せむ。

有神論とは神に關しては何等の制限もなく、即ち神の性質如何を問はず、唯其の存在を信ずるの説なり。

無神論、即ち前者の反對論にして神てふ觀念を排斥す。

多神論とは數多の神を信ずるの説なり。

一神論、唯一の神の存在を確信するなり。

神人同形説、神は人と同形なりとの説。

萬有神教、萬有即ち神なりとの説。

自然神教は即ち十八世紀に起りたる自由信徒の奉じたるものにして凡ての靈奇を拒むと雖、尙神は人の如き物、宇宙の創造者、且つ支配者なりといふを信ず。

充満神論は此世界と神とは決して隔離す可からざる者、即ち神は永遠

に自然界に宿る者なりと説く。

科學的宗教は如何なる神の見解を採用するか。

此宗教は素より有神説にして無神論に非ず。

通常一神論の主張する所を見るに、唯一の神を奉ずるに在り。されば一神論を目して數多の神を併合して一個の神を作りたる多神教の變體なりと謂ふも不可なきなり。思ふに神たる物は唯一にもあらず、はた數多にもあらず、蓋し數を以ては神を云々する能ふまじ。故に神を云ふに神の種類てふ意義を以て唯一といふ可らず、何となれば神には種類あるにあらざればなり。されど神には神たる所あり、即ち唯一の理、唯一の眞理てふ意味に於て神は一なりといふ可し。

科學的宗教は神人同形説及び自然神教を排斥す、蓋し思ふに後者は唯に前者の一種なるのみ。

科學的宗教の神は一の人物にあらず。さりとして人より劣れる者にも非

ず、否、却て無限に大なり。此の宗教の教ふる行爲の憑據は高尚清潔なり。吾人は神を呼んで人の如しとか或は然らずとか言ふ能はず、之れ神は超人間的の物にして、人類を標準として云々する能はざればなり。科學的宗教は萬有神教を奉ぜず、科學的宗教は自然界及び其各部、即ち各方面を看て神と同一視して尊敬せざるなり。唯其自然界中の永遠なる所即ち神なるのみ。吾人の行爲に關する憑據として遜色なき物こそ神なれ。吾人は吾等を利する自然の勢力を貴まざるも、此世界此人類を創り、且つ發達進化の原動力となれる其勢力を奉ず。即ち此説を呼んで充満神論と謂ふなり。

### 第三 科學的宗教の倫理

宗教及び非宗教倫理上に於ける重なる差異は何ぞや。

簡略に言へば古代の宗教倫理は重に神に従順なるべきを以て主旨とし、非宗教倫理は可成的多く快樂を得るを以て主眼としたる傾向あるなり。前者は行爲の標準を客觀に立て、吾人に義務を負はせたるものにて、後者は道德の標準基本を主觀に置きたるものなり。故に前者を呼んで義務の倫理と言ひ、後者を快樂の倫理所謂快樂説と謂ふ。

科學的宗教は快樂説を排斥して義務の倫理説を採用す。夫れ行爲の憑據標準は世界にある客觀的能力なり、而も此者たる實在にして吾人の感情に干渉する所なし。吾曹の義務を正當に判別せんには快樂を願ひ、或は幸福を追索するが如く、吾人の感情に歸依す可らず。然らば倫理上に於ける幸福の位置は如何。

倫理上の問題は幸福に關する所なし。吾人の義務如何ぞとは是れ倫理上重要な問題にして、其義務が吾等を樂ましむると、せざるに拘らず、之を飽くまでも吾等の義務とす。

故に幸福問題は、吾を幸福ならしむる欲求を可成的滿たしむるには如何にすべきかを研究するにあらで、吾人の義務に従ひつゝ幸福を得むには、いかに爲す可きかの講究なり。

偕て又吾人の果すべき義務を懈怠するや、深刻なる悲哀に捕はるゝは事實と言ふべし。又義務に服従すとも、強ち幸福の増加を遮らるゝものにはあらじ。

然らば幸福の深意いかに。

衆人の言ふ幸福、而もいと熱中して得むとする所謂幸福は、事實の眞世界に於ては要々なる位置を占むるものにあらじ。尙吾人の欲求が我を促がす方面に横はるものに非ず。幸福とは此の相對的の人生に伴ふ主觀

的附屬物たるに外ならず。

幸福は之を分數と比較し得べし。分母は即ち我の欲求にして分子は即ち此の欲求を滿す者なり。而して人の天性は恰も分母子が至當の分數たるの關係を保つが如し。夫れ分母は常に分子より大なり、而して通例欲求の滿さるゝは、勿論の事として之を執るべけれど、早晚之をしも快樂なりと感ぜざるに至る。吾人笑ふて言はむ、快樂を感ぜざるは理の當然なり。之れ分子増加せば、之と共に分母も同一の割合を以て増加するが故なり。

然らば進化すると共に幸福は増加すべきか。

義務は吾等に前進せよと教ふ、而して吾人の困苦不快は漸々減却し、吾人の欲求は追々滿さるゝと雖も、其割合を以て幸福も亦増加するものにあらじ。否却て減すと謂ふて可ならむ。誰れか知らざる、小兒は成人より多くの快樂を有し、無教育者は賢人よりも歡喜多く、愚者は愚昧の中



にも幸福を保つなり。

智の進むと共に幸福の減却するあらんには、進歩の如き、教育の如き、其他知識の如きを放擲すべき乎。

若し快樂説にして眞の倫理たらんには、幸福を増加せん爲めに如何なる事を犠牲に供するも何ぞ惜むに足らん。去れど然らざるを如何せん。自然は吾等の理論に毫も關せず。されど我等の理論を立するや、必ず自然に關係せざるを得ず。吾人は成長し進歩せんとす、而して快樂幸福は生涯中の偶然の美貌たるに外ならず。又人生に於ける義務てふことを考ふるや、義務を盡して後に幸福増加するか或は減却するかを問ふべからず、否問ふ能はざるものなり。

然らば幸福を求むるを不道德と見做すべき乎。

佛教に於ても基督教に於ても幸福を求むるの無益なるを認む。されど佛陀及び基督の弟子中、神の意思、行爲の憑據、遍通的道德秩序の精髓を

誤解して、荐りに制慾主義を唱へて幸福を追求するの不道德なるを説くものあり。

遮莫佛陀も基督も制慾主義の倫理を説かざりしは明なり。釋迦牟尼佛曰く、自らを苦むるは道に非ず、濟度せらるゝ事能はずと。基督又其の弟子に斷食せよと教へず。基督自ら食ひつ、飲みつ、去れば彼の敵者彼を難じて『食を嗜み酒を好む人』とぞいひける。

然らば科學的宗教は制慾主義に關して何とか言ふ。

制慾主義の倫理は僧侶の道德なり。消極的なり。生活の破滅を以て目的する者なり。

科學的宗教は快樂説を取らず。又制慾主義をも容れず。是れ兩者共に誤謬あるが故なり。

科學的宗教は吾人をして人間の義務を問はしめ、是に従へよと命ずるなり。

人は自我を知らざる可らず。彼は彼の欲求の孰れか善、孰れか悪なるを  
 甄別せざる可らず。人は行爲憑據の性質を究めざるべからず。是れ彼に  
 義務を命ずる者なり。人は義務を盡さむとするの念を強固ならしめざ  
 る可らず。尙我をして行爲標準の諭告と一致せしめざる可らず。人は神  
 を体内に宿したる人となるべきなり。

是に依りて教へらる、自制は自我に對する重要な義務、正義は他に對  
 する重要な義務たるを。

制慾主義は義務の範圍外に出でむとするものなり。制慾は人の性を破  
 壞し、壓倒して神の如きに至らむと勉むるなり。

眞正なる人性は神が自然界に示現したる者なるを悟れば、此神と人の  
 性とは相容れざるものなりと言ふの痛く誤れるを知るべし。されば人  
 の性を壓するは即ち神を壓するなり。

因に言ふ、此意味にてターレンスの語は屢々引用さるゝなり。其の

語に曰はく *Nihil humani a me alienum puto* と (我より異りたる人の性を  
 思はず)

譯者云、ターレンスは紀元前二百十八年にカトーチに生れ同百  
 五十九年頃身退りたる劇詩人なり。壯年の頃ローマ執政官の奴隸  
 として賣られたるが、主人其の天才を愛で、之に自由を與へき。此  
 時彼は希臘語を學びたりと。或は傳ふメナダーの百〇八の劇詩  
 を譯したる草稿を海底に沈められたるより落膽失望の極、遂に物  
 故せりと。或は言ふ亞細亞に向うて航海しけるが不幸にも破船の  
 爲に死せりと。其孰れか眞なるを知らず。

道德的慾求の下にありて威儀堂々たる眞の人間の何たるかを今は謂  
 はざるべし。さりとして幸福を求むるは決して悪事ならず。又快樂を欲す  
 るも罪業なるにあらず。されど幸福を以て道德の基本となし、快樂を以  
 て人生窮極の目的となすに至つては、之を悪なり罪なりと謂はざるを

得ず。

\* \* \* \* \*  
 休養、快樂を主とし、幸福を欲するは素より人生の目的ならぬと、而かも  
 其れ等の意味が正常なる場合には之を許容すべきなり。否、道徳上の義  
 務として見つべし。精神を休養するが如きは固より必要あり、又幸福は  
 吾等を快爽ならしめ、快爽は事業を進行せしむ。我等の自然性を宗教的  
 に壓迫するは却て義務を果す能はざらしむる所以なり。苦業其物に徳  
 行あるにあらず。活動物の幸福は、まことや、彼等を活潑ならしむる氣噓  
 と云ふべし。

如何なる事實も皆教ふる所あり、將た真理も義務を指示するものなり。  
 我自身の存在、人類に對する關係、實在の性質、及び宇宙の組織は皆共に  
 吾人の注意を要すべき課業を教ふ。されば我自身に對する義務、人類に  
 對する義務、及び人類の將來に對する義務ありと知れ。

\* \* \* \* \*  
 今制慾主義及び快樂説より離れて科學的宗教の規律を簡畧に定むれ  
 ば次の如し。

汝自らを知れ而して汝の汝たる法則を悟れ。

汝の汝たる法則が指示する所の義務を識れ。

常に義務に服従せよ。

得ず。

\* \* \* \* \*  
 休養、快樂を主とし、幸福を欲するは素より人生の目的ならぬと、而かも  
 其れ等の意味が正當なる場合には之を許容すべきなり。否、道德上の義  
 務として見つべし。精神を休養するが如きは固より必要あり、又幸福は  
 吾等を快爽ならしめ、快爽は事業を進行せしむ。我等の自然性を宗教的  
 に壓迫するは却て義務を果す能はざらしむる所以なり。苦業其物に徳  
 行あるにあらず。活動物の幸福は、まことや、彼等を活潑ならしむる氣  
 と言ふべし。

如何なる事實も皆教ふる所あり、將た真理も義務を指示するものなり。  
 我自身の存在、人類に對する關係、實在の性質、及び宇宙の組織は皆共に  
 吾人の注意を要すべき課業を教ふ。されば我自身に對する義務、人類に  
 對する義務、及び人類の將來に對する義務ありと知れ。

\* \* \* \* \*  
 今制慾主義及び快樂説より離れて科學的宗教の規律を簡畧に定むれば  
 次の如し。

汝自らを知れ而して汝の汝たる法則を悟れ。  
 汝の汝たる法則が指示する所の義務を識れ。  
 常に義務に服従せよ。

## 第四 靈魂

吾れ本來何者ぞ。吾れ何處より來り何處にか行く。吾を成したる物其れ何ぞ。我が同胞人類は、吾々を圍繞する他の物と全じく、運動する具體物と我に見ゆ。斯くの如く吾も亦他人に見え、且つ自身にも覺ゆ。然れども我の自我の質は大に異なる。我は生存し、感覺する物にして、我の自我は意識中に顯はるゝなり。我は我れ自身の存在を知る、而して、我の吾が存在を全體として直接に知る以上は、其の全體なる所即ち靈魂と呼ぶるゝなり。

然らば靈魂の性質如何。

吾人の靈魂は衝動、氣質、及び想念に依りて組立てらる。故に我は生存し、意志を有し、且つ思考す。

衝動とは爲さむとする傾のことにして、刺戟のあらゆる種類に依りて、

脈衝し易き物の内に自と起るものなり。此の衝動を屢々反覆するよりして習慣なるもの來る。而して衝動が制し難き習慣となりたるを稱して熱情と言ふ。

記者云。熱情とは英の Passions を譯したるものにして或は之を慾情と譯するともあり。されば Emotion 又は Sentiment と混雜する勿れ。パツシヨンスなる語はカントが使用したる Leidenschaft なる語に當ると言ふ。

遺傳せられたる習慣は、所謂氣質或は性癖なるものを成す。性癖なるものは些細の鼓舞するもの有れば、直ちに活動すると敏し。是等有機物の種々なる機能の基礎と成り、且つ又意識生命の性質を作る。而して其の性質を呼んで通常は偏性と謂ふ。

想念なる者は物、或は物の性質、或は物と物との關係の代表なり。而して是等想念が運動の因と果とを知りて決意的原素となるや、之を運動想

念即動機と謂ふ。

吾等靈魂が衝動を起す初源は、明瞭に知覺せらるゝ能はじ。此等初源の衝動は混じて全軀感覺なる者を成し、全軀感覺は亦漠として知ると難し。去れど時としては特別の阻礙、例へば饑餓渴望等の起るに依りて明白に初源衝動の起るあり。

吾人の初源衝動が活動する範圍は、即ち吾等の吾が生命として感ずる者を成すなり。

各衝動は皆運動せむとする傾あり。而して衝動なる者は生活物に影響を與ふる刺戟に依りて起るものなれば、又反動と呼ばれる。

衝動が明白に意識せらるゝを稱して意志と言ふ。されば意志なるものは複雑なる衝動なりと謂ふも可なり。意志は運動より生ずる結果の何たるかを明晰に知りたる觀念が、重要な動因となりたる場合の運動傾向と言ふを得べし。約言すれば、意志は衝動が運動想念と發達したる

ものなり。

想念は感應より發達す。

思考力ある物の靈魂の特色とは、其の保有する感應が意義を有する所に在り。或る種の刺戟あれば或る種の感覺あり。同刺戟は必ず同感覺を起すものなり。されば種々の感覺が、各皆特種なるは、是れ其の感應を起したる者には種々の條件ありてふことを指示するものなり。かくて感應は意義を有し、意義は明晰を生ず。即ち意味は漠然たる感應を意識の面に昇せたるなり。

感應に意味の附隨し來るや之れ心の初なり。

習慣或は遺傳に依りて有機體の内に起る感覺は、やがて外に投出せられたり。外界は又經驗が吾等に感覺の來るを教へたり。感覺は客觀的實在を示す記號なり。而して有情物の言語機器に依りて言語の發達するや、感覺は人間の生存する全世界に迄も擴布せられき、但し言語は記號

の記號にして諸ての實在を代表するものなり。思考とは何ぞ。理性的思考とは何ぞ。理性とは何ぞ。想念と想念との相結合するは即ち思考なり。諸ての感覺は皆以前感覺したる事の記憶と相關係するものなり。斯くの如くして有情物が漸々發達して思考力を有するに至る。宇宙萬物の實在を發見し且つ之を利用する思考を名づけて理性的思考とはいふ。又理性とは正當なる思考の理法なり。靈魂なる者は種々の衝動を含有すと雖も、又同時に特種なる統一あるものなり。さらば如何にして其統一を知るか。人は相容れざる想念を有するとあるは疑なし。去れど此等不和の想念に従うて同時に運動する能はず。人は矛盾の動力には順次に従ひて事を爲す。而して又常に結果に對して責任ある者とす。さればこそ吾が心に、高尚善真なる想念の宿るに至るや、先の行爲を悔ゆるなれ。

活動上必然の事柄として靈魂の統一なからざる可からず。此の命令的必要なかしせば、統一は決して存せざるものなり。機制體の活動するや常に統一あり。靈魂に於ても亦相容れざる衝動も、矛盾する想念も、皆共に相調和するものなり。斯く必然なる調和作動が健全にして且つ薰習的勢力となりて働く。此の物こそ、諸の想念を取つて實用的方面に試験し、又相反するものを取りて互に衝突せしめ、纏ては靈魂に於ける一つ總合を成すなれ。若し茲に種々異様の衝動ありて、皆其想念を行爲に現さむとするあらんか。素より是等の間に争鬭起るべし。又最大勢力を有する者が勝利を得るに至りて止むべし。而して此の最大なる動力は機制體に依りて處置せらるべし。熱情の勢力の強大なる、野蠻人にとりては實に抵抗すべくもあらざる程なるが、文明の進歩と共に理性的想念漸々勢力を握りて之を壓倒す。

長年月の經驗、或は遺傳の習慣、或は數度の後悔（或る度迄）は人をして充分注意熟慮したる後に作動するの習慣を作らしむる者なり。熱情を制して、あらゆる争闘する運動想念の勢力を節減せしむる習慣は漸々容易の業となる。而して其所業を稱して自制といふ。靈魂の性質は其の内に在る衝動及び運動想念の如何に由るものにして、此等は又人の行爲を定むる重要な分子なり。思慮して後に發表したる計畫は、立法會議の動議と比較し得るなり。即ち議案に對する處置如何の計畫が大多數の議員によりて賛成を得たるが如し。而して此等靈魂の決心を人の意志といふ。靈魂統一の名目如何に。一躰としての機制躰を代表する想念は『我』或は『私』なり。而して此「我」といふも「私」といふも共に思慮したる後のものを自からの決意として見なすと勿論なり。

『我』其物は固より空なる記號のみ。されど其内容は即ち『我』なる者の代表する所にして全靈魂の性質なり。詳言すれば、自我が代表する人物の衝動及び運動想念の性質なり。吾人は言ふ『我に想念あり』と、去れど『我は想念より成る』と言はむ方然るべし。我が想念は我の眞の部分なればなり。『我に一つの想念あり』てふ語は單に、其想念と我自身の全き人物を代表する自我想念とが關係あるを意味するのみ。而してこは意識の全面に現れたる場合に用ゐらるゝのみ。人の自我の内容、更に言へば、人と爲りの内容は變化するものなり。今は此を欲し彼を求む。而して時の移るや屢々相容れざるが如き行爲に出づる事あり。然れども人の作動には一の繼續ありて皆記憶の上に昇りて連れる鎖の如くにして反省せらるゝに至る。反省する場合には人必ず各場合に於て其重要な分子たりし者は己れ自からなるを知るが



故に、恒に同じ代名詞『我』を以て其分子を呼ぶ、此『我』なる代名詞は千變萬化の内に在りて依然として不變なるが故に、纏て誤謬生じて人其物は通じて變化なきものなりと思惟するに至る、

さりながら此活動する人間、機制躰及び我を成す想念は決して不變ならざると確かに且つ明瞭なり。吾人の周圍の變化すると同じく吾自身、吾が思考、吾が欲求、吾が機制躰、さては吾が靈魂すら皆變化するものなり。六月には紅なる薔薇よと愛でながら十月の秋の空となれば、同じき其薔薇を枯凋したる悪き荆棘と賤み惡むは豈適例ならずや。

吾等は自身の肉躰を恆に同じと思へども其實相は常に變じ、其躰を構成したる材料は恰かも原子の複雑なる螺轉の如く、新陳代謝極り無きものなり。されど一躰としての形躰には一致あるものなり。夫れ又斯の如く靈魂存在の保有せらるる間は我が靈魂を一統して代名詞『我』を使用すれども、吾人の想念は其力に於ても、はた、内容に於ても常に變じて

全じからず。成人せば比較的性質の變化少なきも、尙變移あるは勿論なり。是れ注意せられざれば眞理なり。吾人の自我は萬物の尺度なるが故に、吾が自我の變ずるや、萬物亦變ず、而して我人は同躰を保つが如く念ふなり。去れども是の自我が不變なるとは誠に鹵淺なる學說なり。

自我思想を以て眞の靈魂なりと言へる説、行はるれども是れ誤謬なり。自我靈魂の存在は科學上排斥せらる。自我靈魂の觀念を奉じて見解も情操も皆甚しく錯雜したる人あらば其人必ず言はむ、自我説を破るは宗教の根源を絶ち且つ宗教上の願望を消滅するものなりと。

自我靈魂の觀念を破るは宗教上に如何なる影響ありや。吾等の靈魂の性質如何に關する觀念が、近世科學研究の結果に依りて著るしく變化したると、尙ほコヘルニカス以後吾人の宇宙に關する見識が大に變化したるが如し。コヘルニカス氏は地球中心説を破り、心理學は自我中心的思想を碎きぬ、以前は科學が宗教より甚からざる感化

を受けられたれども、將來に於ては宗教が科學より影響せらるゝと、其度に於て前世紀に劣らざるべし。

新真理の發見せらるゝや、少しく怖ろしき念を起すとあり。是れ科學が今迄真理として悦び奉じたる物の誤謬點を破壊せんとするが故なり。一般に真理は破壊的と見ゆれど、少しく密に之を検せよ、其の善良、偉大、貴重なるを、誤謬多きものを美なりと思ひたりし念に勝ること數百度の上なるを知るべし。

此の宗教の根本思想が世の所謂靈魂を破らむとするが故に、一見恐るべくも將た亂暴とも見ゆべし。去れど少しく注意して此問題に近きたらんには、斯く靈魂を科學的に研究するは、宗教を破るにあらず、却て之を高尙にし之を清淨ならしむるを見るに至らむ。即ち諸宗教の所謂不思議なる物を消散せしめて、其れ等の道德上の核仁を保存するなり。形而上的の靈魂ありと言ふべからず、去れど眞の靈魂は吾等の思想及

び理想的憧憬にあるなり。而して前者が後者を誤りなりと證したるの故を以て後者を價值なしと言ふべからず。

自我靈魂を堅く信じ且つ之が爲に萬事を熱心に行ふ宗教心は、即ち之れ眞の靈魂に對する自然の情操の清きを示すものなり。

事實にして往々謬傳せらるゝあり、而して又此謬傳せられたる事實を徒に拒絶する人至つて多し。我等は謬傳を除きて正しき事實を把握せざる可らず。

靈魂の幸福なるは人の望む所なり、否寧ろ人生窮極の目的なり、全世界を掌握すとも其の靈魂を失はば何の幸か有る。

靈魂の價值を如何にして定むるや。

本來人の價值は其人の官位にあるにあらず、彼の同胞より好評せらるゝ所に在るにあらず、財産に在らず、智慧に在らず、才能にあらず、將た又彼の生涯の外面に在るにあらず、噫本來の價值は彼の靈魂にあるなり。

貧き者の靈魂と雖も、富貴なるもの、博學なる者、或は權勢の赫々たる王公よりも劣等なるにあらず。エピクテータスの胸中に横りたる純正の靈魂が、テロ王の靈魂に優りたる事いくばくぞ、而もテロ王の才能は燦爛として、當初には王位にある天才と揄揚せられたるにあらずや。吾人は世俗的事物を指して價值なしと言はず、知識才能を無記の物となさず。否却て此等の賜物、幸運は價值あり、何となれば是等は皆其用を爲せばなり、而も此等を有つに依りて靈魂の生命をして多少鋭敏にし且つ長からしむるを得べきなれば、又排斥すべからざるなり。遮莫靈魂の價値の確定せらるゝは、全く人の性格の道德本質、及び其人の内に充つる情操の高貴なるに因るものなり。

## 第五 不 滅

吾等靈魂の生命は限りあるものなりや。

如何なる人物と雖も、皆特殊の衝動、性質、又は運動、想念より成るものにして、其特質ある所及び相對的勢力のある所、即ち無數の變化を來すものなり。然らば茲に問題生ず、曰はく何處より靈魂を成す原子來り、今現に何をか爲し、又那邊にか行く。

靈魂の一部は吾人の祖先より遺傳し、(性癖を成す)一部は教育に依りて根ざし、(重に想念)一部は模倣より來り、(習慣等)一部は吾等自身經驗したる事の印象によりて作られ、(重に確信)又一部は思省する事より構成せらる、(重に理論)思考即ち靈魂の諸原子間に往來するものは、吾等をして吾が内に存する諸想念を基として、新なる結合思想を造らしむ。此思考あるが故に未來の事實を豫想し得るなり。

去れば靈魂とは永き歴史を有するものにして、吾等の生れし時に始りたる者に非らず、將た死去の時と共に消滅するものに非ず、かるが故に吾等は今此の吾が中に在る想念が、嘗て思はれたる所には必ず生存せり、又再び思はれなむ所には必ず生存すべし、何となれば、吾の肉體勿論吾が物なれど、重に我が物たる者は吾が想念なればなり、吾が眞實の有物は精神上のものに在るなり。

吾が今の生活は廣大なる進化中の只一段たるのみ、吾等の精神的生存即ち靈魂は過去の貴重なる遺傳にして、將來には益々高尚なる生存の程度に進化し、且つ愈々高貴なる運命に醇化すべし。

人の死後靈魂が尙存在すと云ふは決して架空の念にあらず、又蓋然的なるにあらず、はた又假定なるにあらず、否科學的眞理にして經驗より得たる確固たる事實を以て證明し得るなり。若し靈魂が不死不朽なら

ざれば進化なる者を見ると能はず、それ進化の有る所以は吾等祖先の靈魂が不滅にして今我等の内にあればなり、人の靈魂は祖先より遺傳せらるゝ特性及び父母師匠より受けたる教育の特性を有ち、是と共に自身の生涯中經驗したる善或は惡の性を附したるものにて此の人の死するや其の靈魂は祖先の者と相合し、共に流れて滔々たる靈魂不滅の大河を成すなり。

死後靈魂の不滅なるとは古來種々の方法を以て表言せられたり。エロイシスの神秘祭中には譬喩的に現はされり、即ち手より手に傳ふる炬火の如き或は又冬期潜みたる後に穂を出す小麥に譬へられたり。又基督教には肉體復活の教理中に是を説きぬ。

譯者云。エロイシスとはアテン市の北十二哩に在る寒村なるが、其昔は希臘に於ける名ありし市街にして、ギリシヤ全國民殊にアテン人か此地に於て、四年目毎に所謂神秘祭(Mysteria)なるものを執

行したりき。こはツエレス及びプロセルピナの二神を祭るものにして、凡て幽玄奥妙不可思議を以て主とせり。去ればツエレスの御名も Achtheia(惆悵するの意)を以て傳へらるゝを例とせしとか。

ベンジャミン、フランクリンの遺書中、氏が千七百二十八年即ち二十三歳の時物したりと云ふ、碑文發見せられたり。念ふに爾後數回訂正したるらし、又氏は此の事に心を置きて深く思慮を廻らしたるは明かなり。其碑文に曰く

此處にヘンジャミン、フランクリンの肉躰、恰も内容去られ、文字金色の失せたる表紙の如く、唯蟲類の餌食となりて横はる。去れど氏の信じたる如く事業は失せじ。是れ同著者に依りて校閲訂正せられて新しく且つ優美なる印刷を以て再版せらるべければなり。因に言ふ、フランクリン氏は此計畫したる碑文を用ゐざりき。氏は嘗に自身及び其妻の名を刻したる墓石を建むとを願ひぬ。其遺書

は次の如し

『私し身退り候はゞ成るべく荆妻の傍に葬り被下度候又墓標として高サ六尺幅四尺の平なる大理石の上端に多少偶縁ある物に

ベンジャミン

フランクリン

(千七百八——)

デポラー

と刻して我等兩人の上に御建設被下度願上候』

此の碑文中、人を書籍に譬へしは實にいみじき比喻なり、是れ靈魂の直性を明かにすればなり。吾人は製本、紙質、又は印刷の如何を以て書籍の重なる點と見做すの傾あり。去れど吾曹知らざる可からず、此れ等は其の靈魂にあらざる事を。

書籍の靈魂とは其の内容をいふものなり。所謂全有(我等之に依りて生存し、運動し、我等たるの實在を保つ)は陸續として出版せらる。而して一

の書は破滅せらるゝとも、書籍の書籍たる所、即ち其靈魂は消滅するものに非らず。若し夫れ書物の内容にして價值あり且つ眞理を包まむか、則ち訂正増補の上又新たに出版せらるべし、恐らくは製本すら一きは美麗なるべし。

靈魂の内容如何。

約言すれば靈魂の内容は世界圖を造る。而して人類にとりて尤も必要なる部分は人間社會に行はれ、否行はれざるを得ざる諸の關係なり。靈魂の世界圖と言ふも、感覺の發達に従ひて心中に畫かれたる周圍の諸象其まゝを意味するにあらず。夫れ人は自然界の事實を取りて組織的概念を作り、以て諸の事實たる法則を發見す。

吾人も亦其一部たる世界には法則の貫徹するあり。凡ての事皆因果の法則に依りて連絡關係するものにて、我等の所業は皆定りたる果を有するなり。吾人の今斯くあるは、一朝一夕の故にあらず、永劫の進化を經

たるもの而して周圍の物は吾が心に印刻し、吾が想念及び行爲の源たる動機を塑したるものなり。されば吾人の想念及動機は、吾が内に在る者の中頗る純正たる物、即ち眞實に靈魂と呼び得るものなり。若し吾等の想念にして眞實ならんか、はた動機にして正しからんか、即ち吾が内に存在する最高、最善、最貴の部分なり、神靈なり、神の宿れるものなり。靈魂中の靈魂なり。

靈魂の模範とする所ありや。

此の地上に住する理性的動物は、多くの點に關して斯く發達し來りたるよりは異りたる他方面に發達したるやも保し難し。此地球外の遊星に住める理性的動物は吾等と生理上異りたる組織ならむと思ふも強ち理なきにあらず、或は羽翼を有し、或は地球人類の手腕に代ふるに別形の機官を有するならんも保し難し。去れど如何なる者も異りたる理性の發達をなす能はざるなり。彼等の美術も、數學も、或は論理も、吾等の

發達と等しからざるを得ず、尙彼等の倫理の根本たる誠も、此の地球上に住める人類社會の發達進化を促がしたる原子と、全く異なるべからざるなり。換言すれば宇宙の構造は斯くの如きものなり、即ち人間の靈魂の或る性質は、必然的に今有るが如きものなり、又或る他の理性を有する者に於ても亦異なる可からざるものなり。プラトールが言ひし如き實在の模範はなし、されど模範に類する者はあり、理性ある者の性質は、物の實性に因りて規定せられ、且つ條件つけられたり、茲に於てか、人は神の像に創造せられたるとの聖書の詞は又新なる光彩を放つ。

性質に於て永劫、世界の變化中に恒ありて、諸の事實に通ずる法則こそ人間の内に宿りぬれ、略言すれば人間の靈魂に現はれたる者即ち眞理なり、而して眞理は正しく實在を代表する者なり、神の繪なり。

宗教上の眞理とは、世界の各部分を科學的に認識し、且つ自然法則の細部までを理解したる所のみならず、尙吾等にある實有が全き者即ち

所謂神に關して、如何なる連絡あるやを明瞭にしたる者なり。此點を了得するは唯理論的なるべからず、眞理は吾等の情操に好く透過し、吾等の全有に充滿し而して生涯中のあらゆる行爲に於て現はれざるべからず。

何が故に科學的靈魂説は容易に信受せられざる乎。

科學的宗教が建言する科學の靈魂説には靈魂の神聖且つ不滅なる點に關して困難あり、されど其眞理には難あるにあらず、故に吾人は其容易に拒むべくもあらざるのみならず尙必ず證明せらるべきを知るなり。此説が立脚する事實は明かにして議論を戦はすの要なし、されど困難なるは他の性質に關する一點なり、即ち吾人の靈魂は特有ならで神が在りてふとを理解するには、困難ならぬと只之を感ずるに難きを覺ゆるなり。

吾等は唯物物的先入主に支配せらるゝ事常に少なからず、生命の外物に

眞の我を見んと欲す。此の唯物主義の言たる、今日言傳的宗教の形を取りたるものなり。製本、紙質、又は書籍のあらゆる外部は大多數の人にとりては書物の要素にして全く書物の書物たる所と見ゆべし。斯る人にとりては情緒的生命を高めて、純乎たる抽象界に入り、書物即ち人間即ち吾自身の内容即ち靈魂と、外部即ち肉體とを區別するに至るは蓋し難事ならん。

靈魂不滅の問題は道德上の問題なり。道德的意思を有する人は此の問題を正當に解さざる可からず、只此の問題を解したるのみに止らず、吾等之に生活せざる可らず。吾人本來の傾向として不必要なる肉體の存在を以て眞の靈魂と見做し、而して感情、期望、及び恐怖は我等靈魂の現在出版に深く執着せる者なり。

吾人は吾等の思考を變更するのみならず、感情すら交代せしめざるべからず。吾人は情緒を高尙にして吾等中に在る實有は同情を保たざる

可らず。吾等は只瞬秒時の價值のみなる出來事に執着するが如き誤謬に陥らざる様注意すべし。吾等は精神上の本質を立脚地として行爲を定むべし。吾等は此の靈魂の現在出版に睦しからずして、靈魂其物との親交を感ずべきなり。

思慮なき人が自身の標準とする所は何ぞや。

靈魂の何たるかを顧ず、現時の物を以て眞の自我となす人の主義を自理といふ自理主義に傾く人は常に其の立脚地にあるが故に、事物は正當なる遠近景を以て現れず。されば我執の人には全世界も又自身の靈魂も皆誣調せられたる割合を以て畫かる、彼の諸ての感情、同情、嫌忌は皆爲に屈曲せらるゝに至る。

何が故に我執の立脚地を棄つべきか。

我執にのみ従うて其の目的を達せんとするも、其の空なる事は明かなり。彼が務めし所、好結果ありたりとするも、遂には死魔襲ひ來りて、今迄



は、爲めに生きたりし目的も皆滅ぶべし。

自然は我執を欲せず。世に自理主義家ありと雖も、自然は黙々之を忍ぶのみにて人が狹隘なる人生路に入るも、只之をして其自由に任せしむ。されど纏ては彼の行爲を絶ちて、彼が自身の爲めに新入たる内より人類の進歩に必要な部分をのみ、擇び取りて、彼に餘すに結果收穫後の苦き知識及び他人の利益の爲めに蒔きたるが如き知識を以てす。人間の全き情緒的生命が彼の靈魂に集合せらるゝに非れば、其の生涯は誤られたるものなり。

我執的立脚地を放擲するは忍辱にあるか。

我等の所謂靈魂の見解は、自我説に依靠する人にとりては忍辱に依るとし見ゆべし。然り或る意味に於ては忍辱なり。吾人は先づ吾の眞の靈魂は我が物なりてふ思想を除かざる可からず、吾が靈魂は我が物にあらずして、人間一般の物なり、一步進めて謂はゞ、人間一般の物ならで神

より來れり、靈魂は神の中に發達し、其志望する所願ふ所亦皆神に在るなり。

此の靈魂説を指して忍辱するにありと思惟する人あらば、之れ誤謬に陥れるものなり。此の所説中忍辱の無きは、恰も昔の怪談中の牧童が自身王子なりと思ふも、絶えて實なきが如し。忍辱とは眞理の爲に誤謬を棄つるに在り。吾人が吾曹の靈魂なりと思ふ自我は、眞の自我ならで、只映したる影の如きものにして、眞自我は嘗て思考したる者よりは遙かに大なり。世には或る心理學者にして、靈魂の自我觀念を捨つるは、即ち靈魂を無に歸せしむる者なりと言ふあり。若し夫れ然らば此の牧童も亦た同理由を以て彼が今ある位置は拭ひ去られてけりと云ひ得るなり。

吾人の吾人たる實在の範圍が廣りたらんには、吾等其滅絶を語らざるべし、最初に赤面する度を超過すれば顔面所謂千枚となりて最早忍耐

として言はざるに至るなり。

此の靈魂の見解を指して忍辱となす人は、彼の同情、願望、恐怖が尙ほ外界の存在に執着するを示すなり。我等の自我執着心が眞靈魂存在の念に移るや直ちに斯く見識の變ずとも、聊かも忍辱する所なきに至るべし。

自我説を放擲するに如何なる障礙かある。

障礙起りたり、即ち吾人の勞力したる所を他人が穫收するならんには我等又何の満足かある、はた是を公平と謂ふべきかと。されど此障礙たる尙自我説に執着するが故に起りたるものなり。未來の時代は他人の所有にあらざるは眞なり。其等時代は尙吾曹の所有なり。吾等亦斯の如く前代の幸福のみならず前時代の實在即ち靈魂をすら承け次ぎぬ。されば予輩は前代の後續者なり。

前代の者が今尙吾等の一部として生存すると決して虚妄ならず。若し

前代の靈魂生命が全滅して、跡だに残さざるものとせば我等が存在も亦忽ちに絶滅して皆無とならざる可からず。是より思考すれば死後尙靈魂の存在するとは、いかに誠なるかを確知し得べし。吾等の親密なる靈魂は常に我等と共にありて、世界瓦解の時まで生存して離れざるべし。

此新見解の靈魂は如何なるとを命ず。

吾等の精神的本質は吾等に義務を負はしむ。我等に教ふるに此の生活は一層高遠圓滿なる進化の一方面と見做すべきを以てし、命ずるに此瞬秒有限なる存在の狭少なる内より脱離すべきを以てす。

吾等の此の區々たる存在を脱するや否や、生死の境は消滅して不朽不滅の大氣を呼吸するに至る。遮莫此の立脚地の變化あるや大結果あるものにして、我等生存の全面に影響を與へ根本より變更したる世界觀を我等に作らしむ。誠に此變化あるや新たに生れたるが如くにして、就

中吾等の行爲中に感ぜらるべし。靈魂不滅に於ける立脚地が高處に昇るや新主義來りて殆んど先の習慣を悉く轉覆すべし。而して又是非善惡を定むる新標準も規定せらるべし。

道德上の誠は即ち行爲の規則にして、新たに生れて靈魂生活を高めたる人には勿論従ふべきものと知らる。而して此の人の情操及び状態の表出は基督教に於ては愛と呼はるゝものなり。

道德上の誠めは我執の人には強ひて蒙らさるゝものにして、我執の人又此等を強迫的なりと思ふなり。されど愛を知れる人は斯の如くに感ぜず、而も心いと寛かに訓言に隨ふ。

吾人の同情は高等なる自我の同情ならざる可からず。若し夫れ高等ならんか、法則などの干渉なく、而もいかなる法律或は公道の命ずる所をも自由に行ふを得るなり。

道德上の行爲中には忍辱なるものゝ有る莫し。道德上の行爲は吾が性

格の表出ならざるべからず、即ち行爲は我等の内にある實在の性質より天真爛漫自然に流出せざるべからず。

## 第六 神話と宗教

科學的宗教は他の宗教を如何に見る。

科學的宗教は言傳的宗教の精神と反する莫し、否此宗教は其等諸宗教の熟したるものなれば、言傳的宗教を目して道路を開通したる前驅者となす。

宗義的宗教は寓意或は譬喩談を以て眞理を教へむと計りたる神話なり、而して此等は眞宗教の預言たりしなり。

神話は有害なりや。

神話其物は有害なるにあらず、却て宗教のみならず科學の發達には缺くべからざる階段なり。人の思考を廻らす様式は重に神話的なり、如何なる言語と雖も多く其基礎を比喩に置く、且つ恐らくは形容語を使用するにあらずれば、吾人或は談ずると能はざるべし。

科學的宗教は古代の神話を破壊せむとて起りたるにあらず、否な此の宗教の來りたるは其れ等を圓滿に發達せしめむが爲なり。

科學的神話の性質如何。

科學も亦た宗教の如く神話時代を通過しぬ、而かも今尙ほ多くの點に於て通行しつゝあるなり、而して此神話的時代には往々空想或は過大なる奇想の認めらるゝあり、占星術は天文學に先ち、鍊金術は化學に先たり。

今日の化學者にして鍊金術家を蔑視し、天文學者にして占星術家を卑下するは過の大なる者なり、吾等の祖先が吾等より劣りたるの故を以て、むげに彼等を誹り嘲るは其人の見識の小なるか或は知識の缺乏するかを現すものなり、パロン、リーヒ氏は時の録々たる化學者なりしが尙ほ深く上代の鍊金術家を敬尊して其の大志、學識を賞したるにあらずや、必竟するに我等は祖先の肩の上に立脚するものなれば、祖先は嘲

弄ならで感謝をこそ受くべき人なれ。原人を輕んずる勿れ、彼等の勞力によりて此人間の存在高まりたればなり。

科學的神話は今尙我等の中に附着す。

何が故に神話は有害物となりしや。

神話が有害となりしは神話其物を眞理と見做したるが故なり。

斯くして教理に自足するの念生じ、遂には眞理研究の進路を絶つに至る。

神話的宗教の起源如何。

歴史附の宗教の建てられたるは、科學も、研究の方法も未だ皆無なりし時代に在り。されど宗教の必要は昔ながらも之有りたるなり。人民は精神上の補佐、撫慰乃び保護なくしては生存する能はざりき。上代の埃及人が未だ發明物の原理を知らざる以前より、工事に用ゐる鐵槌其他の器具を發明したるが如く、或は又人類が一般に自然に言語を發明して

交談に供したるも、言語學的知識は云はずもあれ、其他文法、論理の知識すら莫かりし如くに、我等の祖先中に預言者なる者起りて、暴悪有罪なる行の必ず憂苦を來すを自然に觀じて、二三の簡單なる行爲の規則を教へけり。

預言者の説教したる所、或は又惡業の惡報あるを見て、恐ろしさの餘り強て行ふたる高尚なる所作に因りて、人類は一段高き地位に登りぬ。是に於てか人間は道德的訓戒を與ふる宗教的憑據の必要を感じ、且つ之を理解せり。斯くして建てられたる宗教上の信仰は不完全なる形なりしとはいへ、尙人生の苦難に慫からざる慰撫と補佐を與ふるに充分なりし淵源なりき。

宗教は又自然法則に従うて發達す。人類の肉體、其他諸ての生物のみならず、低觸すべからざる精神上の物、即ち科學、法律、言語、社會組織の如きも皆進化し來りたるものにして、宗教も亦其の例外ならず。

科學界の假定中往々にして形容語の助けを要するとなり。而して其形容語たる文飾甚だ多きものとす。例へば吾人は電氣流通と云うて電氣を恰も河流の如きものと見做す。斯く形容語的文字を使用するは科學界の研究に大なる役目を務むと雖も、眞の科學とは謂ふべからず。此等は科學的・神話と謂ふべきなり。

科學的・神話が科學研究の範圍に於て離るべからざるものたるに、猶ほ宗教界に於けるが如し。されど科學的研究の理想とするところは、事實の簡單なる開陳にして、常に此理想を忘れざるが故に、此等神話的なるは單に其目的に達する迄の方法たるに過ぎざるを記憶すべし。

吾等は今科學上に於ても哲學上に於ても、神話の束縛を脱し得るに至りたれど、獨り宗教界に於ては尙神話を因襲せざるべからざる歟。

宗教の前進するや、又科學哲學と同一の方向を取るなり。

科學の進歩とは、新思想の建てられて、舊思想を洗滌したるを意味する

なり。事實を正當に開陳せむには、神話的・元素を除かざるべからず。而して後ちに來りたる者は顆粒にして前者は渣屑なり。後者は眞理にして前者の神話は眞理に達する迄の方便に過ぎず。

渣屑は殻皮の如し、顆粒は此殻皮が好く保護するにあらざれば生長するに能はず。神話的・寓意談に含まるゝ眞理は、寓意談の要素にして鑿穿、保存せらるべきなり。而して其殘物は除き去らる。されど是は中身の生長に取りていみじくも働きたるものなれば、科學の歴史には登録せらるべきなり。

宗教も亦科學の如く進歩生長を主とす。宗教の進歩とは眞理の増長なり。而して神話より脱離せむとするに在り。

宗教は人の行爲を規定する世界觀なり。吾人の世界觀は新知識と共に進み、而して吾人が行爲の道德的規則を定むる其等新思想は、纏て宗教的思想となるものなり。

科學が拙陋なる靈魂論に源を發したるが如く、宗教も亦迷信多き神話より源流を發しぬ而して、宗教の理想とする所、亦科學の如く眞理を増長すると共に、神話的原素を祛かむとするに在り。吾人の知識にして進歩せば愈々假定の必要なくして、今迄の神話的表言に代ふるに精密なる事實の開陳を以てするに至る。科學も宗教も共に、簡單にして而も盡せる事實の開陳に基礎を置かるべく、又其の事實は常に完全にして愈々緻密なる經驗に依りて擴張せらるべきなり。

## 科學的宗教

宗教的發達の窮極の目的は、眞理を認めて、是に一致和合して生活せむとするに在るなり。

神話其物を眞理と思惟するは即ち鄙教なり。

鄙教とは寓意談を以て其意味とし、文字を以て精髓とし、神話を以て眞理なりとする總念を謂ふ。

德義、公正、美、愛、其他の理想が、眞實に存在すと信ずるは固より誤謬にあ

## 科學的宗教

らざるなり。又精神上の眼光暗くして實在を見、且つ悟ると能はざる人にとりては彼の彫刻家或は詩人が、或は大理石を以て神軀を刻み、或は想像を以て理想を畫くが如き代表物は、利益ある所尠からず。比喻に惡しき點あるにあらず、寓意談に瑕瑾あるにあらず。去れど其等の神を人間のとし、神話を確實なる眞理となすが如きは、大なる誤解の魔力に捕はれたる者と謂はざるべからず。而して此の誤解を名づけて鄙教とは謂ふなり。

鄙教は偶像禮拜を惹起す。表象に過ぎざる者を崇拜するは即ち偶像禮拜者なり。

今日の宗義的宗教は尙鄙教の下に在るなり。其れ等宗教中、最も高尚高貴にして、而も寛仁なる基督教すら、尙偶像禮拜の古衣を脱かず。是れ種々の習慣或は儀式などの内に現はるゝ事實なり。所謂犠牲なる者は捨てられたるも、祈禱、供奉、其他の式を見るに、尙鄙教的思想ありて、神を以

て人間の如き者となし、神は名譽を受くるを悦び、又特別なる理由あれば、其意志を變更し、又は己の愛する者の爲めには、自然の秩序をすら變更する者の如く見做すなり。

科學的宗教は鄙教及び偶像禮拜を排斥す。

科學的宗教は供奉を事とするが如きを取らず。去れど尙唯一の崇拜を教ふ、即ち精神及び眞理を奉じて道德的行爲の憑據に従ふに在り。科學的宗教は吾が意志を變ずるにあらで、神の意志を變せむとするが如き祈禱を繰り返すを撥斥す。科學的宗教の許す祈禱とは他にあらざり、而して我等はナザレのイエスと共に言はむとす、「我等の心にあらず、聖旨を成就せしめ賜へ」と。

宗教眞理の淵源は何ぞや。

科學的宗教は特種なる啓示などを知らず、唯吾人の經驗の中に来りて、

吾等すべての前に開かるゝ眞理の示現を承認するのみ。即ち吾等を圍む自然界の出來事、及び吾が心の情緒に於ける眞理の示現を承認するなり。

宗教は超自然的啓示に負ふ所なし。去れど科學を成り立たしむる其の自然界の啓示に負ふ所あり。

從來の宗教は重に神話的なり。何となれば開祖が教理を説くに、其の時代に好く適したる様に、譬喩或は寓意的の形骸を以てしたればなり。科學の發達と共に新問題こそ起りたれ。されば吾人の宗教たりし神話は著るしく不用の物とはなり畢んぬ。吾人又寓意談中より抽象したる教理を以て満足せざるに至りたり。

宗教と科學との間に衝突ありや。

眞正なる宗教及び眞正なる科學の間には決して衝突する所なし。若し衝突する點あらば、是れ其孰れにか偏頗なる點を含むを示すものにて



吾人は此兩者を仔細に閱せざる可からず。現今科學と宗教と相衝突する所は不信仰者は宗教の喘着手段を嘲けり、固信家は斷乎として理性を棄てむとする一點に在り。思ふに不信仰者も固信家も、共に宗教の神話を見て、宗教其物なりと思ふの誤謬中に彷徨する者なり。然らば如何にすべきか。

固信家は科學を壓倒せんとし、科學者は又宗教の根を絶たむとす。吾人は固信家に服すべきか、彼等は鄙教の誤謬を維持せむとす。將た又不信仰者に歸すべきか、科學が未だ神話より超脱せざるの故を以て之を棄つべき乎。今日と雖も尙此の社會に野蠻時代の痕跡を遺すの故を以て人類を滅絶すべきか、鄙教の迷信に滿つる思想が、依然存在するの故を以て宗教を驅除すべきか。

吾等は固信家にも將た不信仰者にも從はず、されど疑念なく進歩の道

に進まむと欲す。是れ自然に定められたる道にして、欲すると欲せざるに拘らず必ず辿らざる可からざるなり。進歩を旨とする各宗教の向ふ理想は、發達して真理の宗教となるなり。此の理想に達せんには科學的研究方法の助けに因りて真正に真理を研究する唯一の道あるのみ。基督教には「不可見教會」なる理想あり。而して宗教心の最も強き基督教信者と雖も、現在の教會は決して理想を現實したるものにあらざるを承認す。而して所謂不可見教會てふ理想は、獨り此科學的宗教に於て現實せらるゝのみなり。

## 第七 基督と基督教徒二者の對比

便宜の爲め茲にイエスとキリストとを區別す、即ちイエスなる名は歴史上殆んど二千年前確かに生存したりし人なるを示し、彼の生存したりしは信ずるに充分なる理由あり、又キリストとは理想上の名にして基督教會を成すに重大なる要素となり、且つ四福音書中に表はされたるものなりとす。

イエスがキリストなりしか、換言すれば福音書中の記事は、歴史的事實なるか、或は神話的なるか、如何の問題は、茲に精しく論ぜざるべし、茲の問題は全く科學的性質にして、唯現今の教會中、尙流行する鄙教的迷信の下に在る人を警醒せしむるの外、又實際上の宗教に關する所なし。聖書中の記事が歴史的事實なるか否やはこゝに全く要なし。されど理想キリストの眞理なるや否やは決して不問に歸すべからず、吾等は言ふ

是れ眞なりと。其眞理が既に承認せられたる以上はキリストの精神は生存し運動し且つ實在を保つものなり。

因に言ふイエス問題は今や解釋せられたりと言ふを得べし、而して福音書中の記事を、弛まず倦まず研究したる結果はストラッスブルヒ大學の神學教授ホルツマン氏の著作『新約全書集註』中に總べられたり。氏の著作は自由教主義の人が著したるにあらで耶蘇信者にして神學專問家の物したる者なれば一層の價値あり。殊に氏の著作は皆敬虔の念あると共に又科學的にして批評的なり。ホルツマン氏の結論は積極的即ち肯定的なり。氏の説によればイエスは歴史上實在せし人物にして、其人の性格及び運命は福音書中最も古き馬可傳に於て最も好く模索せらるべしと言ふ。

キリスト生存時代にありたる靈驗に對する信仰は全く自と福音書中に入りぬ。されども吾輩は是を指して絶對的に有害なり、此の事の有る

は悲しむべきとなりと云ふ能はず。否却て此等靈驗及び信仰は理想キリストの力を示すものなり。凡て歴史上の運動は多少に拘はらず、美しき物語を有するものにして、此等物語は史上の事實其物よりは却てよく歴史の意味を教ふ。是れ物語は詩的幻像を以て史上大運動の盛大なる力を想はしむるが故なり。其處に我等は人類の心中を窺ひて彼等の大望ある所、驚く所、或は彼等の胸中に横はれる理想の如何を識り得るなり。基督教にして若し今日存するが如き神話なかしせば、まことに無味乾燥たるを免かれず。元來神話中に發見せらるべき缺點なし。されど宗教思想發達の爲めに物せられたる神話を誤解する人に過錯あるなり。

吾人は今日の科學が福音書中の詩的詐偽を研究して得たる結果を受け入れむ、されど之と共にキリスト今尙生存し且つ吾輩の文明全體が、キリストの精神によりて遍滿せらるゝは事實なりと揚言す。基督紀元

二世紀以後歴史上人間の發達したるは全くキリストが原動力となりしものにてキリストは進化の原譜なりと云ふを得。又此思想の勢力が番外とせられ、或は其榮光が他の光明の爲めに光を失ふに至ると恐らくは無かるべし。何となれば理想キリストは模範なりと言はんより寧ろ一の傾向なり、其理想は道德上の進歩の方向を示せども、特種なる目的なく、圓滿完了を期望するを表はせども、既定の憑據ならず。かく基督教は嚴格且つ確乎不拔の道德ありて、模範を作るに非常なる素養あり。されば又進歩生長して廣大となり得べきものなり。

キリストは人間社會に於て、人類を常に高尚なる目的、高貴なる徳に導き進ましめつゝある不可見なる超人間的動力なり。キリストは人類の凡てより優れり、而して我等の基督教徒たるはキリストの靈が内に存するが故なり。

福音書中のキリスト即ち基督教の理想となりたるキリストは、基督信

者の所謂キリストとは大に異なる所あり、——吾人は寧ろ言はん、自身基督教徒と稱しながら鄙教的にキリストを崇拜する輩——自身キリストに従ふ者なりと言ふ人は概して其名に背けり、如何となれば若しキリスト現はれなば、キリストは彼等の所謂キリストを承認せざるべければなり。

所謂熱心なる基督教徒すら、此の宗教を咒物禮拜と敢て異らざる宗教となし、又多くの點に於てキリストの教理と相反する道德を行ふ。彼等の崇拜とは、供奉を事とし、跪座して異端教の禮式の如きを行ふに在り、されど胡んぞ知らざる此等は却つてキリストの命を破れる事を。彼等は神話的傳承に信仰を置きて、真理の精髓を誤認する者なり。今吾輩をして次にキリストと所謂基督教徒との著むる矛盾ある要點の二三を簡單に擧げしめよ。

\* \* \* \* \*

キリストは道なり、真理なり、生命なり。されど市中に於て尾籠がましく基督教徒なりとて、頭を振る者は道を塞ぐ者なり、真理を暗ます者なり、生命を破る者なり。彼等は信仰を云ひ立て、人爲の他の規律を申し立て、盲信心を抱かむとを欲し、一方に於ては真理を悟り、進路を取らむとする者を靴下に壓倒する者なり。

キリスト道なりとは是れ進化の精神、即ち常に道德の圓滿に向はむとを意味するなり、然るに所謂基督教徒は人類の手足に桔槔を置きたればこそ真理、自由、進歩の主なる壓制者と呼ばるゝなれ。キリスト曰く、

イザヤは偽善者なる爾曹を指してよく預言せり其録し、言に「此民は唇にて我を敬へども其心は吾に遠かれり、人の誠を教となして徒らに我を拜す」と曰へり。夫れ爾曹は神の誠を捨て人の遺傳を守れり……爾曹は實に己

の遺傳を守らんとて能くも神の誠を棄つる者なり。

(馬可七章六一九)

宣教師或は僧侶の教訓と、自然の書物にある永遠の啓示と孰れが神の意志なる。吾等は前者を唯信用して受くるのみなれど、後者に至りては各自経験より之を握り得るなり。前者は變轉極りなく、之に依靠すべからざるも、後者は思索され且つ確實ならしむるを得るなり。凡ての國民の文字殊に宗教的傳承に關する經文の如きは、皆我等の爲めに自然界の無數の法則に神の啓示ある其意義を解さむとて物されたる者なり。我等をして經典を探らしめ、且つ科學者の著作を學ばしめよ。去れど常に念頭に懸けよ、イザヤが語るもダーウインが揚言するも、眞理は即ち神の示現なるを。尙且つ此れ彼れの誠或は彼の聖文或は神聖なる言傳の如きは多くの中の最小なる者なりと謂ふ勿れ。

先つ頃シカゴ大博覽會の管理者に、或人が問ひしと同様なるをバリ

サイ人がイエスの弟子に問ひたりき。即ち

爾曹安息日になすまじき事をするは何故ぞ

と云ひし時イエス彼等に答て曰ひけるは

爾曹の内の一の羊を有つ者あらんに若し其羊安息日に坑に陥らば之を挈上ざる乎

人は羊より優ると幾何ぞや。然らば安息日に善を行ふは宜し。

安息日は人の爲めに設けられたる者にして人は安息日の爲めに設けられたる者にあらず

さらば人の子は安息日にも主たるなり

(馬太十二章十一、十二、及馬可二章二七、二八)

初世紀の基督信徒は安息日を捨て、日曜日を以て聖き日と爲しぬ。而して此の日曜日は安息するの日ならでキリスト復活の記念日なり。然るに現今の信者等は如何にして此の日を祝すべきかを知らず。彼等は

復活の靈驗を信ずと雖もキリストの靈は彼等の精神中に高まらざるなり。

所謂基督信者は古代の鄙敎的思想を再呼したる者なり、鄙敎の説に依れば日曜日は休日、即ち此日には人々の事業を取るは願はしからざるなりと言ふに在り、彼等は人類を日曜日の奴隸と成す者なり、彼等は無垢なる快樂、有用なる知識を閉ぢ塞ぎ、而も此の禁制あるが爲めに却て人民に不淨なる樂を與ふるが如き惡事を成す人に強き惡加勢を與ふるに至るなり。キリスト今一度降りて

安息日には善を行すと生を救ふと殺すと孰れかなすべきと問はざるべからざるか。噫。

人心の發達に廣大善良なる影響を與ふる歡樂が、博物館、圖書館、其他博覽會に具備せらるゝを疑ふ者何處にか有る。我等の此諸館に臨むや、努力するなく、勉勵するなくして、而も充分なる心の食物を得るにあらず

や。此等は醉生夢死の樂にあらず此等は生命を與へ生命を救ふ者なり。キリスト敎へて安息日に生を救ひ病めるを治し弱きを助くるは善と云ひ給へり。

固より初代の基督信徒中、或る者は猶太風俗に従うて安息日を祝しぬ。保羅は又之を許したりしが、尙勇敢に此の事に關しては自由を與ふべしと主張したり。羅馬書に曰く、

或人は此日を彼日に愈れりとし或人は諸日もみな同じとす、各自から定めて其心を堅くすべし。  
日を守る者も主の爲めに守り、日を守らざる者も主の爲めに守らず。

されど又安息日に汚瀆の行なき様、殊勝にも謹慎を加ふるガラテヤ人に送りし書に云ひけるは、

汝等慎て月と日と節と歳とを守る、

われ爾曹に付て危む、恐らくは爾曹の爲めに我が勤めしとの空しくならむとを。

(加拉太四〇十、十一)

安息日を惡ざまに解するは鄙教家の鄙教家たる所以なり。鄙教主義の行はるゝ間は真正の基督教精神も空に歸するのみ。宗教を奇異の物となす偽善者に悲あれ、基督教を有害物となすサウス・コット派に悲あれ、爾曹は盲者の手を取る盲者の嚮導者なり、汝等は爾の祭壇に書き記す聖き御名を穢す者なり。

吾人は日曜日を廢せよと云ふにあらざ、又第七日に労働者を使役せよと言ふにあらざ、否却て日曜日を以て宗教日及び無束縛の休日とすべきを敢て云ふ。されどハリサイ人が行うたるが如く惡しざまに費さんとする主義には大反對を唱ふ。尙吾人は基督以前の時代に屬する野蠻的・行爲に反對す、今日の基督教國は、此の野蠻的規律を拒絶すれども英國のみ其例外なり。英國は中世紀の初に當りて古代の誤解されたる宗

教上の傳説より斯る愚を取り入れたるなり。

吾人は日曜日を要す、されど其日たる近時のハリサイ人が國民に惡ざまに注入したるが如き安息日ならざるは論ずる迄もなし、吾等は休息歡樂及び教訓の日を要すれど、全く活動の廢止を意味する謬信的遊逸を欲せず。約言すれば、寛大なる、宗教的精神にして而も真正なる基督教日曜日を望むなり。

キリストが智を棄てよ、不條理なる者を信ぜよ、盲目信仰を以て教理を信せよと教へたと決して莫し。否之に反してキリストは要求しぬ、事物を好く檢し、眞妄を識別し、時代の預兆を觀破せんことを。吾人の感覺は常に開かれて研究せざるべからず、吾人の判定力は常に健全にして事を理解せざるべからず。聽かむと欲する耳あるものをして聞かしめよ、思考せむと欲する志ある者をして思考せしめよ。

基督信徒の之と異なる何ぞ夫れ甚だしき。彼等は盲目信仰を欲し、研究せ

ず、感覺を信せず、又理性に頼らず。  
 若し理性にして信ずべからずんば、其他此世に於て吾人の依頼すべき者果して何ぞ。理性にして其光明消滅せんか、吾人の情操、吾人の炎情、吾人の熱望、凡て皆無に歸せむ。理性あらざれば吾人は暗黒の内に彷徨すカント云はずや、

人類及び人間にとりて神聖なる者の朋友たる人よ、事實なると或は理論的議論なるとに拘はらず、意を用る公正に之を研究したる後ち、信ずべければ直に之を承諾せよ。去れど理性の特権と争ふ勿れ。理性の特権とは、理性が地球上最善にして、即ち真理の窮極の標準たればなり。若し然らずんば汝の自主の權は全く價值なく、汝は之を失ふべし。是れ疑なし。

\* \* \* \* \*  
 キリストが祈禱を斥けたるは、祈禱は吾等の意志を通ぜむとを神に請

ふものなりとの意味を以て排斥したるなり。是れキリストか神は人ど異り、不易にして所詮懇願などを以て彼の意志を動かすべからざるを識りたるが故なり。

キリストは懇願せず賞賛せず、將た神の榮光をたゝえず。彼は跪坐せむとを要求せず。彼は靈驗の如き、或は特別の慈愛の如き者を願はず、將た超格の人格たらむを請はず。彼の生涯中最も哀むべき瞬間に於てすら、從容自若として自己の精神を信じて變せず、其の精神は彼の祈禱の中に生命を取れり、曰はく『我が心のまゝにあらざ聖旨にまかせ給へ』と。  
 キリスト山にて教へらく、

爾曹祈る時は異邦人の如く重複語を言ふ勿れ、彼等は言多きを以て聽かむと意へり。

是故に彼等に効ふと勿れ爾曹の父は求めざる先に其需用物を知りたまへばなり。



然らば爾曹かく祈るべし、天に在ます我儕の父よ願はくは御名を尊崇させ給へ、

樂國を來らせ給へ、聖旨の天に成る如く地にも成らせ給へ、

我儕の日用の糧を今日も與へ給へ、

我儕に罪を犯す者を我がゆるすが如く我儕の罪を免し給へ、

我儕を試探に遇せず要より救ひ出し給へ、

(此次に『國と權と榮は爾の極なく有たまふ所なりアーメン』とあれど是は後人の蛇足なり。)

爾曹若し人の罪を許さば天に在ます汝等の父も亦汝等を免し給はむ、

されどももし人の罪を免るさずは爾曹の父も亦汝等の罪を免し給はざるべし。

身軀上の必要を請ふ唯一の祈禱あるのみ。吾人の娛樂とか、或は勞働せ

ば自然の財産中より得らるゝ物の如きを請求するにあらず。勞働すれば得らるへしとは之れ忘るへからざる格言なり。吾人の些細なる要求を満さむが爲めの祈禱はなし、凡て他の要求は第三度目の祈禱即ち『聖旨にまかせ給へ』云々と繰返せば足れり。

所謂基督信者は常に『重復語』を言ふ、故にキリストが説きたる祈禱の意味は今日殆んど失はれたり。

かく基督信者の祈禱には誤謬のあるとを晒らすと雖も、吾人は又信徒が祈らんとするに當り、之が爲めに落膽するが如きを欲せず、何となれば祈禱に因りて、未だキリストを知らざる人の心中に、キリストの靈、感動すればなり、若し祈禱にして眞正ならんには祈は彼等を補け、彼等を成熟せしめ、彼等の憂患を除きて快活ならしめ、彼等に力を與へ、彼等を鄙教より救ひてキリストの基督教に發達進歩せしむ。彼等の精神愈々進歩しなば、愈々神を談ずるに幼なき空語を避くるに至る。而してキリ

ストの如く祈るに至り、終に彼等の全き有は神の意志が残りなく成就せられたる者とならん。

神聖なる信者にしてキリストの祈禱の意味を以て祈らむ爲め、先づ『何をか祈るべき』と自問自答せよ。必ず悟るべし。特種の変を願ふは、小見の空願の如くもあり、且つ無要の事たるを。

祈る時には神の意志を變じ我意を通さむとの心を以てすべからず。さりながら、詮ずる處、祈禱が神に影響を與ふるとは、或る意味に於て眞理たるを許さざるべからず。祈禱は神、世界、同胞に對して吾等の状態を變ぜしむ、而して吾等の状態が變するや、外界の物も亦變ずるなり。吾人の性が小心翼翼たると、平心自若たるとに依りて大差あり。されど吾等の或位置より他に移るや、大なる變化の來るは明白なり。即ち我等の面する事業も、吾等の對抗する危難も、吾等の負ふ義務も、凡て其容貌を變ず而して此變化が吾等の最後の行爲を定むる、重要な動機たると往々

にして之あり。

今自然界に關する知識を一例とし見む。自然の法則は不易なり。然るに蠻族は自然の勢力の前に跪き、我等は之を利用す。電氣不變なれども、吾等の祖先は之を恐懼したると甚だしく、我等は之が爲めに便を得たると大なり。まことや自然の法則は不變不動なれど、此に對する人類の狀態の變化が自然其物の根本的變化を來したるが如く思はしむるなり。若し知識にして、かゝる驚くべき變更を呈し得るならんには、宗教狀態の善意も亦改革の力を持たざるか、福を與ふる力を有せざるか、將た救濟の力を有たざる乎、

\* \* \* \* \*

若し祈禱が懇願の意味ならば、祈を全廢するに若くはなし。實に主の祈は吾等に我意を通ぜむ爲め神に請願するを止めざるべからずと誠るものなり。

キリストの祈は、神と吾々の意志を調和する自修の行なるに、基督信者の祈は規則に従うたる如く皆靈驗を得むとする懇願にして、譬へば乞食の請求の如し。基督信者の祈は、清淨となされ得るものなれど、現今にては全く魔法家の魔法と同性質なり、傳へ云ふ魔法とは或る不可思議なる呪文を唱ふるとにして、唱ふれば靈驗忽ちに現はるべしと。

キヨニヒベルヒの大哲學者はキリストの所謂祈禱の意味ならで、基督信者と同一義にて此の文字を使用せり、されど尙曰はく、

祈をして天法に従へる結果以外を望まむとするは愚の至りにして論駁するの必要もなし。吾人は唯問はん。天法に従へる結果を得む爲めに祈を爲すにあらずやと、天法に従へる結果とは、今此の心中に暗黒にして錯亂極りなき想念が祈りに因りて清めらるゝか、或は勉力の度を増加するが如き、或は又徳義心が一層高き功徳の位置に進む等を云ふなり云々。

吾人は云はむとす、前上の理由に因り、祈禱とは只主觀的に薦めらるゝ者なり、何となれば薦められたる祈禱の結果を、他の方法にて握り得る人にとりては、祈禱の必要なければなり。

或人思へらく『若し我れ神に祈るとするも、我は決して心を痛ましむるとなし、何となれば若し神の存在なかりせば、偕てこそ我は善事を多く行ふたるなれ。若し又神在しまさば、祈は我を助くるなり』と。斯る祈禱は偽善の甚だしき者なり。何となれば吾人は豫め知る、神に祈る者は神の存在を確く信ずる者なり。

かるが故に高德に進みたる人は祈禱するを止む。是れ正眞を以て主義とすればなり。尙祈禱中に呼ばるゝ者にして、高德の人に駭きて自身赤面する者もあるべし。

公衆に説教する場合には祈禱を必ず行ふべし、是れ祈禱は詩的功能有つ者にして、公衆に著るしく影響を與ふるが故なり。加之説

教の時には公衆の感覺的なる所に訴へ、且つ可成的彼等に謙遜すべきなり。

カントが『高德に進みたる人は祈禱するを止む』と云ひたるは最も注意すべき警語なり。殊に氏は又『祈禱中に呼ばるゝ者にして高德に駭きて自身赤面する者もあるべし』と面白き觀察を加へたるは奇なりと言ふべし。

主の祈は普通の意味の祈ならず、重複語を以て超人間的の物を動さむとする懇願ならず。主の祈りは語らるゝよりも、寧ろ生命を取らざるべからず。若し我等是に依りて生きなば祈禱の必要なし。其精神は吾が靈魂の部分とならざるべからず。是に於てか吾が全き生命は『聖旨にまかせ給へ』てふ意義の實例とこそなるべけれ。

最後に一言せむ、世多く偽善の祈禱をなす者あり、何となれば聲を發して祈る者も、或は又内密に己の念を表白する者も、共に神を以

て感覺に觸れ得べき者の如く見做すが故なり。此の主義たる單に彼が自己の理を以て擅に捏造したるものに外ならず。

キリストの祈は神の意に任ずるものにて基督教徒の祈は己等の利便の爲めに一事の行はれよかしとて猥りに靈驗を願ふ者なり。キリストの祈は神の意志ならで吾等の意志を變ぜむと務むるなり。神は意志を満し吾等の義務を全うせむとて自からを大とするにあり。

此等はキリスト及び基督教徒、キリストの信仰と基督教徒の信仰、キリストの祈禱と基督教徒の祈及びキリストの宗教と教會主義との間に齟齬する要點なり。キリストは救世主なり、寛仁なる者なり、改革者なり。所謂基督教徒は障礙者なり、苦惱を加ふる者なり。

キリストの詞には驚くべき救の言葉ありと雖も、基督教徒は之を知らざるなり。彼等は暗きを歩む者にて、自身の何たるかをすら認めざるなり。彼等は自身を聖人と信ず、まことや彼等は學者とパリサイ人の心の

第七 基督と基督教徒二者の對比  
子孫なり。

一〇〇

若しキリストの名にして其光榮を失はば、罪は彼等の名を次ぎたる者にあるなり、而して自由宗教は最大改革者にして、且つ自由と自由の思考を保護したる偉人が、一たび失ふたる光輪を回復する者と呼ばるゝに至らむ。

科學的宗教は正教信者なりと自ら揚言する人々の所謂基督教にあらざ、否其者たると能はざるなり、然れどもキリストの基督教にして長く斯くあるべし。

## 第八 宗教精神の神聖

古代の言傳的宗教は人間をして真理の恩惠幸福に與らしめんとしたるなり、其れと知るとなきも真理を感ぜしむるを得たり、去れば人間は神話及び真理の混合物を得たるなり、而して此時代には素より科學的研究のあるべくも非ざれど、尙彼等は其真理を保ち之を實際に應用せり。

未だ宗教の奥義を知らず、又秘密精神の光明を見ざる初心者に取りては、宗教は一の不可思議なる物と見ゆべし、又真理に暗き人は神話を見て人間の愚懵過錯の集合物に外ならずと思ふべし。

熱心なる信仰に因りて言はむ、智と言はるゝ者にして科學的宗教に依りて排斥せらるゝは絶えて莫し、吾等は破るべからず、將た犯すべからざる法則を確く信じ能ふ、否信せざるべからず、吾等と萬有とは親密な

る個人的關係を保つ、否保たざるべからず。吾等は萬有に依り、萬有の中に萬有に向うて生活する者なり。此萬有は驚くべき法則の調和を以て吾等の全き存在を圍み、且つ茲に貫徹す。吾等其力の下を脱する能はず。げに偉大なり、壯嚴なり、完了せり。所詮筆を以ては寫すべくもあらず。是れぞ凡ての幸の源なり、是れ吾等に慈恩を與ふるものなり、其慈恩たるや、唯親父の慈愛に比較し得べきのみ。去れど父の愛に優ること遙かなり、又我等の知る如何なる者よりも遙かに勝れり。何となれば此者は萬物を包括し、父の愛は常に一時の光明なればなり。

吾人にして我自身の實有が萬有の示現たるを知り、此の眞の自我は自然の神が宿れるなりと感じ、我等の意志即ち神の意志なりと悟るに至らば、人生の煩惱も、憂患も、皆消滅して安を得べし。天の平穩我等の内に布かるべし。我等争ふも、勝つも、躓くも、倒るゝも、悦ぶも、悲しむも、生くるも、死するも、我等にあらで偉大なる萬有が苦惱し争闘するを知り、且つ

## 科 學 的 宗 教

我が内、我が大志に萬有が實在を保ち、其偉大なる者が我曹の願慕心を清め、尙人生の諸の煩惱を洗ふを知るなり。

吾人は喜樂の爲めに生存せず、是れ眞の喜樂は得べからざればなり。

我等は事實を完うせむために生存す、吾等に教會あり、又我等に負はされたる義務あり。

事業を完うし、教會と一致し、義務を盡すに因りてこそ、満足なるものを得らるゝなれ。

吾等の中に動く神の卓喜するにあらざれば眞の幸福は存在せざるなり。

今若し眞理の表はされたる文字を考ふれば、科學的宗教と成立教會の宗義的宗教との間に無間の溪谷横はるを知る、是れ即ち神話と眞理、宗教と科學、偶像禮拜と自信、迷信と宗教、固執と正義とを區別する溪谷なり。

## 科 學 的 宗 教

眞理を感じたる精神を考ふるに、古代の宗教に於ても今日の科學的宗教に於ても其の精神は相同なるを知るなり。

偉大なる宗教者が述べたる詞の精神は、又科學的宗教を活かす詞と衝突するとなし、而して諸ての詞中、最美最善にして壯嚴なるはガリレアの大主の言葉なり。

宗教の精神は高貴眞正なれども、宗義的感動ありて恰も枕毒の如くに人類の宗教を害す。嗚呼所謂教理あるが爲めに、鋭敏にして最も科學的なる研究者の教會より排斥せられたる幾何ぞや。而も今尙驅除せられつゝあるなり。宗義は人の情操を壓へ、神聖なる炎情を起さしむる自然の外誘物を除くなり。さはさりながら尙ほ正教信徒の中に、眞の宗教光明未だ失せやらで、往々にして輝くもあり。基督教々理開祖の一人なるオーガスタンは其の後續者の抱けるが如き不見識狹少なる精神を有たざりき。時々狹少の如く見ゆと雖も、彼が基督教に就きて抱ける概念

は頗る廣し。されば彼は基督教を、世界的宗教、眞理の宗教、或は尙科學者が此宗教は宇宙の構造に基礎を置けりと推理するに至るべき宗教とも云ひ得しならん。彼にとりては基督教なる名は宇宙眞理を旨とする世界宗教と同一にして、只其頃其の名を得たるものと考へたるなり。故に曰はく、

今キリスト教と呼ばるゝ者と同一なる者復た古代の人類中に存したり。人類の始より此の宗教は存したる者なるがキリスト肉體を取りて現はれ給ひし以後より、其の眞の宗教は基督教と呼ばるゝに至りぬ。

吾人は尙科學的宗教及びタウラーの教が文字上ならねど、其の精神上に於て好く相似するの著るしきを見るなり。

今二三の例を引きなば、其相似する所明かなるべし。

タウラーの説教の要點を撮摘したる章句は、氏の説教の三大要點を合

むものにしし』如何にして全く我を脱して神に入るべき乎』を論せり。茲に注意すべき一事あり、即ちタウラーが使用したる文字は我等の物と異なるあり。科學の使用によれば『自然』なる語は實在即ち諸物の存在、自然の法則及び我等の精神上の實在を包括しての意味なれど、タウラーの使用したるによれば只人間の下等なる欲求、及び此の欲求を巧みに起す物を意味するなり。タウラーの所謂自然とは佛教の生死大海に相當す。尙解すれば個人的存任の虚偽、我執の迷妄、瞬秒間の娛樂等は、虚空の衢なるとを意味するなり。

タウラー曰はく

予は茲に此書中に論述したる諸てを總持する三要點を簡畧に述べむと欲す。

其第一要點は次の如し。己の身を清淨になさむとし、神にとりて真正且つ確固たる者たらんとし、全情、全靈、全心を以て神を愛さむと

し、我が身の如く隣人を憫み、而して内部即ち己が心に神ぞ在しまらずと、眞實に感ぜむとする者は、神ならぬ者に對する世俗的愛情、執着心等、悉く是を刺し殺して呼吸なきに至らしめざる可からず。

何物か神的にして何物か神ならぬ者てふ點に關しては、異説あるとを言はざるべからず。例をとらむに、家族的生活の義務、事務に熱衷する事、其他技術に對する賞讃などは、タウラー排斥せざりしとするも、タウラー時代の高僧等は皆指して神ならぬ者と言ひぬ。科學的宗教は消極論の誤謬を退け、制慾主義の桎梏を脱離せり。去れど此の神の性質如何に關する意見は異るとも、主義の相似を見るには何等の妨も莫かるべし。タウラー語を次で曰ふ。

第二要點は次の事を願ふなり。此處に有限の時を願ひ、かしこにこそしなえの生命を願ふ、最高なる眞理を認めむと欲する者は、凡ての事に於て精神の快樂を超越せざる可からず。精神は快樂中に自



身を求め、自からを意ふが故なり。嗚呼俗なる乎哉。人生の外界に執着するを離るれば、今や精神上の快樂我等の内に起り來るなり。精神は一種の空想を悦び、一種の方畧に依りて樂まざる。精神は此等を第二の自我として愛慕し、之を目的し、之を尋ぬ。かくて精神は此等の者の捕虜となりて真理の光明より隠るゝが故に、慧日は彼を照さざるなり。精神の自愛の念には、精神の容易に歸服する所に於て、自愛の念は煌々たる真理の光を妨げて暗淡たらしむる者なり。まことに神を尋ね、神を悦び、神を味はむと欲せば、いかなる練習も思慮も、思考も、或は活動も、聰明をも用ゐべからず。精神は此等の内に寧ろ自身を尋ぬるなり。此等心の活動の目的は、神にあらで自我なればなり。

此文字たる自我が個人的に不死不滅なりとの説の爲めに物されたる夥多の議論と同一真理を言ふにあらざや。自我の不滅なるの外、いかな

る不滅も満足を與へずとは、往々揚言せられたる語なり。まことの科學が教ふる靈魂不滅説の如きは、タウラーの高潔なる真理に達せざる者に取りては不満足なるべし。唯自我の不死不滅を以て満足する輩は神を尋ぬる者にあらざ、自我を以て主とするものなり。タウラー第二要點を更に説明して第三要點に移れり、

此の状態、神を尋ね、神を悦び、神を味ふに於ては自然は其娛樂を犠牲に供せざるべからず。自我を求むるの念は全く跡を絶たざるべからず……正當なる意味にて云へば自我の死滅するなり。是れ眞の虛無、消滅、喪心、棄絶なるものなり。神の外殘る者なく、彼の外に保つ者なし。彼に在るの外安はなし。かくて神は人と共にあり、人の内に在りて聖旨を行ひ給ふ。神欲し、神動き、神輝き、神働く、而して人は皆無なるが故に欲せず、動かす、輝かず、否神彼れに在るにあらざれば生存せざるなり。かくてこそ方略、事業、目的に於て皆無となる



眞實に得たる人へのみ示現せらるゝなり。宗教は一方に於て我執的欲求を捨てしめ、我等に正しき精神を教ふ。我等は是を以て行爲を定めざるべからず。又他方に於ては漸次に我等を高尙にし、自然なる神格の高上なる立脚地より人生を眺めしむ。我等は有限の者を有限と見て、無限の者と我が實有とを相一致せむるなり。宗教が吾曹を導びきて登りたる高地の空氣は誠に新鮮にして健康に適し、又能く我等を支ふなり。

科學的宗教は今日ある宗教的及び神話的なる宗教に代らむとするにあらず、否教會宗教は却て科學的宗教の代理なり、未だ眞理の來らざる間は此等宗教は皆暫時の間、建言する神話にして、宜きに適ひたる者なり。若し圓滿なる者來らむか。一部分なる者は除かるゝなり。今や神話は其價值を漸次に失はむとす、されど眞理は永劫に宿るべし。

科學的宗教終

科 學 的 宗 教

附

録

## 科學的宗教的天啓としての科學附錄

パウルケーラス 述

長谷川 誠也 譯

大名聲ある佛國の學者は『未來の無宗教』なる書を物して、其内に宗教なる物は遂には消滅すべしと斷言せり。而して此説はバツクル及びレキなどの歴史家によりて雷同せられたるが、彼等恐らく其説を布衍して次のごとく言ふなるべし、從來は中心となりて人の注意を呼びたる神學上の問題も、今は跡方もなく忘れられて、問題たるを得ざるなり。現今にありて誰か又神の子は父なる神に相似なるか、將た相同なるかを問ふべき。バインブルの章句の解釋に就きて戰鬪を賭する政府何處にかある。今や又た *Forty-two* なる文字が『是れ吾が躰なり』てふ意義なるか、或

は『是れ我が躰を代表す』てふ義なるかの問題に關して反駁も起らざるべし。

バックル、レキトの唱ふるが如く、神學問題、否寧ろ過去の神學問題が隠没したるは誠なり。されど宗教が人類の進化に於ける動因たるを止めたりと言ふは眞にあらざ。否、却て宗教なる物は吾等人世の内部に浸染したるが故に我等は之を獨立なる勢力なりとすら考へざるに至りぬ。之を譬ふれば、吾を圍繞する空氣の如し、吾は大氣を吸ふなり、去れど空氣其物には注意を向けざるなり。

我等の祖先が一方に於ては、愛の宗教を宣べ、而も他方に於ては、自身の國家を守りて國粹を保存せんとする敵者を、無慙にも虐殺せんと欲すれば之を爲し與へしなるべし。去れど吾人の道德神經は、祖先の者よりも著るしく感じ易くなりぬるが故に、其等の不正を憤るなり。さりどて吾人は宗教的正理の愛を語らず、否、倫理上の正理なる愛を言ふなり。

教會に従はざる者は罰すべしとの苛酷なる規律も今や廢せられたり。吾輩はもはや不信仰者又は背教者の燒かるゝを聞かず、何となれば人類凡てが異端的となりぬればなり。詳言すれば今日の最もまじめなる牧師も祖先の時代にあらば或は異端者の一人なるべし、又吾等各人も若し念ふ所を自由に語らば、皆な火刑柱に縛せらるべし、何となれば孰れも多少に拘らず科學的研究の結果を採用したればなり。忠實なる僧侶と雖も尚ユベリニカス太陽系或は進化論を信ず、然るに此等の發見は其初に當りては異端なり、危険なり、と考へられたり、去りながら此等の理論は宗教を破壊したるにあらざ、只或る神學にて誤り述べられたる點を破りたるなり。吾等の宗教上の見解は失はれたるに非ず、否一層深刻となり且つ重大となりぬ。昔は非宗教とし見做れたる科學的創説も今や宗教的事實となり、我等の心界を擴張し、且宗教的同情を濃厚になせり。サムエル時代の宗教境界線は、單にバレスチンに限られ、中世期

時代は歐洲にのみ限られたれど、我等時代は全宇宙を以て區域とす。イスラエル人が奉ぜし國家的の猶太教は人類的となり、基督教の人類的是は、擴りて宇宙的となりぬ。

野羊、小羊を犠牲とする風も後を絶ちたり、然るに今尙宗教上の式、或は見解に多少鄙教的の分子あるを見る。吾人は宜しく此等の點を捨つべきなり。去れど宗教は永遠に存すべし。其のバツクル、レキ、或はギニアの輩と共に、無宗教時代に進歩すべしとの考を抱くものは、必竟するに宗教に對する純潔なる概念に近づきたる者なり、即ち歩一步は誤謬を脱して益々眞理に近づけり。

宗教は破壊し難きものなり、何となれば人間の行爲を支配する内部の確信は即ち宗教なればなり、宗教は我等に生命の麵麩を與ふ。夫れ然り、人類が道徳を没して生活し得ざる間は、宗教なる者は人間に取りて缺くべからざる者なり。上記せる宗教に對する意見を、或人は餘りに曠漠

なりとして、宗教は神に於ける信仰ならざる可からずと主唱す、若し神及び信仰といふ語に關して、吾等と同様の意見を懷き、而して右の定義を下したらんには、予輩争でか異議を挿まん。予は神を以て超自然的の人間と見なさず（上代に云へるが如く）神は道徳上大切なる一の思想なり。神こそ道徳上爲すべき事柄の憑據なれ。科學は神が人間的ならぬことを證明す、而して此世界には一種の勢力ありて、永滅てふ刑罰の下に或る行を爲さしむるあるを拒まず。それ神を人の如く考ふるは比喩なり、又父として思ふは寓意なり。其比喩や適せり、其寓意や美なり、去れど吾人は此等比喩は眞理を宿すと雖も、其物が眞理にあらざるを忘れざらんやう心すべし。神は我等の如き人間にあらざり、又祖先たる父母の如くにもあらざり、只父に比較し得べきのみ、されど父よりは大なり。神は人體的にあらず、吾人體的なる所を脱したる者なり、彼は剛傑にもあらず、只神なり。彼は吾等の生命の生命なり、宇宙を支ふる勢力なり、諸てに貫

徹したる法則なり。彼は罪惡に災害を下し、正義に幸福を與ふ、彼は物の一致なり、愛なり、科學の可能性なり、知識の眞理なり、光明なり、我等依りて以て動き、以て生活し、且つ存在を保つ實在なり。神は生命なり、而して生活の條件即ち道德なり。之を略言すれば、神は行爲の憑據なり。科學の神とは斯の如き者なり、されば神を信ずるとは從來の經典或は傳説が神に關して述ぶるが如き者を眞理と見做す意にあらざ。信仰なる文字は希臘の *θεός* と同意義ならざるべからず、ピスチスは信任或は誠實と譯する方、當を得たりと謂ふべし。一步を進めんに、ヘブリエーの *אמונה* と同意義なるべきなり、此の文字は確固たるてふ意味の動詞 *aman* より起りたる者にして品性の確定堅固てふ義なり。故に神を信ずるとは道德法則に誤らざる様服従すてふ意義なるべきなり。科學即ち正實なる科學は失錯多き人間の事業にあらざ、科學は神的なり、科學は神の現れなり、科學を通じてこそ神は吾等と共に語るなれ、科學に於て神我に語る、科學は眞理に關する報知を與ふ、而して眞理は神の意志をば啓示す。

科學の形象文字の意味を解くは、容易の業にあらざるは誠なり、而も尙ほ時としては道德の根據を顛覆するが如く見ゆ、例へばハックスレー教授の如し。されど此等の如き誤謬は豫め覺悟せざるべからず、而して吾人は又此の誤の爲めに科學に對する信依心を動かすべからず。理性なる者は人生に於ける神々しき閃光なり、科學なる者は此理性を秩序正しく應用したるものにして、我等に眞理の窮極の標準を與ふるなり。科學を捨てんか、是れ即ち人間の神的なる所を滅し、自依心を失はしめ、且つ子として神に對する關係を絶棄する者なり、否、奴婢の子となし、言傳の奴隸となすなり、斯く判断力が既に捕虜となりぬる以上は、人間の權利奪はれて眞理を追究する能はざるなり、科學を拒絶するは正しき人間の價値を滅却するものなり、且つ神と交話し得べき唯一の道を絶

科 學 的 宗 教

つ。斯くして宗教を迷信と成すなり。或宗教家にして科學を排斥し、且つ其影響が宗教の範圍内に及ばむことを懼れて大に防禦を試むるものあり。此等一派の人々は科學を天啓と見做さざるのみならず、尙宗教には宗教特有の天啓あり、而して天啓は嘗て示されたり、此の天啓を信ぜざるべからず(盲目的に)如何なる批評をも加ふべからずと主張すなり。

此種の人に限りて皆誠實正義なれど、惜乎哉其心狹少にして判断力に乏し。地上に於ける生活は着々として歩を進むるに拘はらず、彼等の宗教理想は恰も化石の如く依然として變らず。靜止は彼等の主義とする所なり。彼等は、宗教も亦進化しべき事、知識的及び道德的發達は宗教の生命及び健康に缺くべからざるの條件たる事を知らず、且つ科學なる者は宗教の敵にあらず、却て宗教の姉妹たり、共働者たるを解せざるなり。科學は宗教を助け、宗教は之に依りて發達進歩すべき眞の道を見出

さむ。

附

錄

スコラの或學者は固信の神學者たり、且つ全時に哲學者たらんと欲してけるが、此の二元の結果は極端に走りて宗教的眞理及び哲學的眞理の區別を爲し、遂には宗教上の眞理も哲學上にては全く偽なるべし(及び其の反)と云ふに至りぬ。此の言や、倫理上許すべからざるのみならず、尙又道德上何等の價值なきものなり。否、瀆聖の者なり、然らば眞理とは何ぞや、

眞理とは想念と其想念中に現はされたる事實との相合を言ふ、換言すれば正當に事實を開陳することなり。スコラ哲學の泰斗トマス、アキィナスは眞理を定義して *adaequatio intellectus et rei* (知識と物との正當なる配合)と云へり。げに然りと謂ふべし。

科學的眞理とは何ぞや、

夥多の陳述中には眞なる物ありとも、或は漠然と拙陋に表言せるあり、

或は誤謬を混ざるものあらん、或は誤導する物あらん、或人は之を是認し、或人は之を承認せざることあらん、或は又其陳述が如何に正式且つ眞理たりとも是を證據する能はざることあり、或は又或る假定の上に立ちて運好く言ひ當てたる物もあらん、斯る眞理は凡て不完全なり、是等は科學的眞理にあらず、所謂科學的眞理とは拒絶すべからざる證明又は試験に依りて證明され且つ精密明亮なる詞によりて表はされたる物を謂ふなり。

宗教上の眞理とは何ぞや。

宗教上の眞理とは其の完全なると不完全なるとに拘はらず吾人の道德的行爲に直接の關係を有する事實或は教理の正當なる陳述を謂ふ。事實の陳述にして『汝偽る勿れ』『汝盜む勿れ』『汝猜む勿れ』などいふ法則に應用さるゝこそ宗教上の眞理なれ

かるが故に科學的眞理と道德的眞理とは隔離したる者にあらず、各自

科 學 的 宗 教

附

異なりたる範圍を有したる者にあらず、眞理は其形式及び陳述の方法に於て科學的と成るも其實質即ち内容に於て宗教的たるなり。去れば眞理にして宗教的たるも科學的性質を缺くものあり、又此の兩性質を具備せるあり。去れど宗教的と科學的との間に全く異りたる理は決して有ることなし。一方には宗教的、他方には科學的など、云ふが如く眞理に種類のあるべきなし。此兩者は決して衝突する者にあらず。スコラ

の格言即ち宗教に於て眞の陳述も哲學上にては偽なることあるべし

(及び其の反)といふは大なる癡言なり。宗教的眞理の性質は又科學的眞理の性質なり、眞理は唯一なり、氷炭相容れざるが如き二個の眞理は有るべくもあらず、勿論衝突てふことは宗教のみならず科學にも常に生起するなれど、是は只誤謬あるを告ぐる徴なるのみ。宗教上に科學上より異様なる眞理確定法ありとは言ふ能はず、吾人にして若し理性と科學とを放擲せむか、吾人は眞理の窮極

錄



標準を保たざるなり。

人間が威儀を保ちて子たる資格あるは必竟するに眞理を確定し之を知るの能力あるが故なり、理性あるが故に人は神の模倣たるなり、而して科學は人間の最高能力の操練なり。

往時宗教は屢々本能的に眞理を發見し、之を大膽にも實行上に應用したりき、然し當時科學は其等眞理を證明し得る程度迄發達せざりき、畧言すれば理性的論議が認識せしむる以前に當りて、宗教は本能的に最も重要な道德的眞理に先鞭を加へたり、此の本能的否寧ろ直覺的眞理承得が所謂預言者てふ宗教的偉人物を現はしたるなり、故に彼等預言者の陳述は、殆んど皆科學的研究に建言せられたるに非ず、將た又實着精細を旨として立したるにもあらず、彼等の訓言は論理的にあらずして感情的なり、而して公衆の理解し易からん爲めに物したれば、種々の形容語に富めり。

科 學 的 宗 教

附

兎に角宗教は智見の不可思議なる淵源又は神來に因りて眞理を引出したり、其眞理たる組織立ちたる科學的の如くにあらねど一閃光の如く將た神在すが如し、宗教的本能は吾等の祖先に道德的眞理の或重要な物を教へたりと雖も、彼等時代の知識は狹隘なりしが故に、彼等祖先は他の方法に依りて知るを得ざりしなり。

輓近殊にダーフィン以後科學は生物界に於ける本能を研究して功を積みたり、本能は驚くべき能力にして巨大且つ生活保存の力あり、此物や又人間進化に重要な位置を占む。

人は殆んど各の實際界に於て、事情を運好く結合し、且つ想像の力に因りて理解し得ざるにも拘はらず人類進化にとりて重要な發明を爲したり。

録

エルンスト、マツフ教授は彼のいみぢき著作に『機械學』中に言へるあり『本能即ち字内の機轉に於ける無反省的知識は疑もなく、常に諸現象

の科學的即ち意識的研究に魁せり。前者即ち本能は、吾人の要求を充たす宇宙の機轉との關係より起りたるものなり。又最も初步なる真理了得は個人の上に相傳するものにあらず、一種族の發達上豫め結果されたる者なり。

事實上、機械的經驗及機械的科學(現今用ゐらるゝと同義にて)の二區別をなすの必要あり。勿論機械的經驗は餘程古き者なり。埃及及びアッシリアの古き紀念物を細密に檢せば、器具及び機械的の種々なる類が諸所に描かれたるを見るべし。去れど此等人種の科學的知識は全く缺けたるにあらずとするも、尙劣等の甚だしき状態に在りたるは疑を容れず。故に一方に於て頗る巧に應用する所あるも、其傍らには實に野蠻粗暴なる手段を利用せり。例へば巨石を運送せん爲め、橇を用ゐたるが如し。それ等の點より見れば、凡て本能的、不完全なる且つ遇然的とも謂つべき性質を帶ぶるなり。

斯の如く歴史以前の時代の石碑なども亦器具調度を示せども、其等器具は皆機械的經驗に過ぎず。畧言すれば理論が立てらるゝ以前に、永らくの間器具機械、機械的經驗及び機械的知識、滿ち充てりと謂ふべし。

本能的知恵は斯く著るきものなり。而して器具調度に於けるのみならず、尙人の道徳的生活を規定せる上に於ても著るき關係あり。基督以前數世紀即ち倫理なるものが、未だ科學として知られざる時、既に東方の聖賢は己の敵を愛せよと教へたり。一例を取ればダンマバダの内に『瞋恚は瞋恚を以て鎮むべくもあらず。瞋恚は愛に因りて鎮めらるべきなり』云々とあり。基督の説教は、其時代の人に取りては、實行し難く、且つ架空の考として見做されたれど、吾輩の時代に在りては、宗教道徳の根本は人性の心的及び社會的法則より割出さるべき正當の應用なりてふ事を學びてより、始めて是を理解するに至れり。歐洲哲學者中瞋恚は愛

の力に因りて征服せらるるといふ意味を論理的に論ぜしはスピノザを以て嚆矢とす。

有史以前の本能的發明が、頗る巧に應用する所あるも、其傍らには實に粗暴野蠻なる手段を利用せるが如く、宗教も亦高尙なる道德の傍らに倫理的眞理の智見に就て、悲しむべき缺點を有しき、例へばモセスによりてイスラエル人に傳へられたるエホバの命、即ち埃及人より金銀の船を盗めとの如きは如何にぞや。又ヤエルが無慙にもシセラを屠りしが如きを見よ、縦ひ時代の野蠻なる所に適すとも是れ厭嫌すべき行爲にあらざや。然るにデボラ之を謳うて、賞美し且つ眞似よと大呼せり。豈暴ならずや。(士師記四章自十八節至廿一節參照)

尙此處に一例を取らむ、保羅が結婚に對する見解は果して如何にぞや。未婚の者及び寡婦に對して結婚すべからずと忠告しながら、尙保守する能はざる者は、例外なりとて『情慾を燃さむよりは結婚する方却て勝

れり』と言へり。是れ果して宗教的結婚の見解と稱すべきか、神聖なる結合に因りて男女の運命を共にすてふ神聖なる本性を全く不問に歸せり。靈と靈とを結ぶ相互の同情友誼などを不問に歸したり。但し男女を結ぶものは此の情慾よりは同情の點に於て重なるなり。子孫といふ點にも思慮を向けずして單に下等なる欲求を以て結婚許可の條件となすは何事ぞ。彼は結婚の神聖を理解せざるなり。保羅の結婚觀は、人間の性的關係の倫理に就きて正しき概念を抱かざるを示す、彼は人間を下等動物の如く見做して此問題の重要なる所を量り得ざりしなり。吾人は多くの點に於て使徒保羅を賞美すと雖も、獨り此結婚觀あるに於て彼は非基督教信者なり、此點に於て彼は使徒たるの資格なし、聖書に是あるは實に一大瑕疵なり、是は非宗教的なり、宗教上あるまじき事なり。

他の點に於ては神聖なれども、斯かる不完全點汚點ありと言ふに當り

て尙是を拒むが如き固信家何處にかある。理性的、科學的研究の光明を遮りて、依然此等瑕瑾を他の貴き情操と共に保守せむとする人那邊にか有る。

予が先に引用したる著者エルンスト、マツフ氏の如き科學家は、今日の機械學は、昔日の機械的發明を破壊せむ爲め起りたるにあらで、却て其等を妥當の者と成さむ爲なるを曉知す。夫れ又斯の如く、宗教眞理に於ける科學的智見は、宗教を破壊せむが爲めに來りたるに非ず、宗教を洗滌し且つ之を擴張せむが爲なり。

宗教家が科學より學び得むことを厭忌するは、是自然の勢にして、且つ許すべき也。大宗教家起るや、彼は周圍の人々に深刻なる印象を残す、故に彼の使徒は祖師の精神のみならず其説教の其言語を汚さざらんやう常に怠らず。其尊敬は善し、去れど極端に走りて眞理定説の上にする其言傳を位せしむべからず、宗教に熱衷するとも偏宗的たるべからず、

是れ纏て救は或特種の宗教にのみ限るとの見解を下すに至る者なり。從來起りたる大預言者、即ちザラストラ、佛陀、孔子、ソクラテス、モゼス及び荆棘の冠を戴きて十字架の上に於て死したる人は、皆浩瀚にして寛大なる心を有したるが故に優れるなり。

民數記略十一章に言へり。  
時に一人の少者奔り來り、モーセに告て、エルダテとメダテ營の中に  
て豫言すと言ければ、

その少時よりしてモーセの從者たりしタンの子ヨシニアこたへて  
曰けるは、汝主モーセこれを禁めたまへ、

モーセこれに言けるは、汝われが爲めに媚嫉を起すや、エホバの民の  
旨預言者とならんことまたエホバのその靈に之を降したまはんこ  
どこそ願はしけれ、

大宗教の高祖は其弟子等よりは定かに寛大なりき。使徒約翰は、ナザレ

のイエスの愛者なりしと猶ほヨシニアのモーセに於ける如くなりしが、彼も亦基督の名に因りて悪魔を追ひ出したる者を譴責して謹慎を欠けり。ヨハネは其者を禁じたれどキリストは其愛する弟子の熱衷を賞せずして却て曰く

其人を禁る勿れ……

我儕に敵たはざる者は我儕に屬く者なり。

ヨシニアとヨハネとの精神は彼等の師が特別に許可するに非ざれば説教豫言するを禁せむとする者にして、是れ纏ては偏宗的状態を來す者なり。偏宗的状態は言傳の定説を宗教上の信仰及び眞理の問題に關する最高裁判所と見做す者にて寛大普遍の正理を甚だしく傷ふなり。吾等の祖師を重んずるは、往々吾等の最重なる義務、即ち眞理を偏頗なく承認すべき義務に對して怠を來す。故に宗教家の或一部が科學を嫌厭するは、縱ひ自然の勢として許すべきも、尙是れを由々しき缺點と認

むべきなり。是道德上の誤謬なり、否非宗教的状態なり。

予は自身宗教上保守主義を濫用して大に苦みき。予は自身忠實なる信徒として不信者をいたく罵り、且つ墮獄的憤恚の煽を高めたるを経験せり。

現今宗教上の神話と宗教とは全く同化して、神話が誤謬なりと認識せらるゝ場合には、宗教其物も瓦解すべき有様なり。されば信徒たる者は規定の教理の其文字を承認し、信仰すべく嚴命せられ、然らざれば永遠に失はるべしと教へらる。斯る主義の宗教を傳ふる者よ、爾は忠實にして神の生靈が自身の宗教上の確信の誤謬を、曠大なる科學的證明を以て反對するに當り、如何なる苦惱を感ずるやを量り得るか。宗教と共に斃れ、其義務を果たし、神を愛し、神を信じ、神に頼り、神に信依するの外又他事を願はざる者は、非眞理を觀ずれば、不信仰の陷阱に擲げ入れらるるが如き感を起すべし。爾等は科學の大音を滅し得べしと思考する

か。科學は永年の間は誘惑として見做されたり、去れど科學の力や強大、其正理たる動かすべからず、而も神々として決して打勝たるべくもあらず。宗教上の信仰及び科學的智見の衝突に因りて、心穩かならぬ生靈ありとも、終に彼は勝利を占むべきなり。斯く教理に就きて狐疑するや、今迄の高貴なりし望もあへなく毀れ、最高の理想も幻像となり、生命の目的も消え去り、唯瓦解が凡てを支配するならん。

忠實なる基督信徒が異端者の位置に至るや、其剛膽其の意味は實に量り知る可からず此人や煩悶苦惱の位置に陥りて、自身は地獄道に行きつゝあるか、將た然らずして天國の高尙なる標木に向ひつゝあるやの判断に苦むべし。

譯者云此處にゲーテ作『ファウスト』の一節を引用したる者あれども、節略せり、但し其意は次節に等し。

忠實なる信徒にして一たび不信の位置に至らんか、彼の住めりし浮世

附

は破壊す彼は基督教の基礎に誤謬あるを觀破す、彼は凡てを滅さむとす。爾の心中に此状態に於ける熱心、嚴格及び恐怖を畫き見よ、然らば此不信の苦味は非宗教的精神ある證據にあらざるを知るべし、非宗教的乖僻は失望の表現にして、往々宗教的情操を示すべし、其情操や不幸なる境遇よりして紊亂し遂に腐敗して酸味を帯ばむ、此の故に酷烈なる自由信徒を宗教の敵者と視る勿れ、高等なる位置に進歩すべき其發達の階段を過ぎる兄弟として彼等を視よ。彼等は眞理を研究して、古代宗教を不完全なりと認識したれど、未だ他の宗教即ち破滅したる宗教の代りに、他の純潔なる者を建設するに、力量を欠乏する者なり。教理を破壊するは宗教其者の破滅の如く見ゆと雖も、其實は宗教の進歩なり。

トピット其祈に曰はく

神は地獄に下し而して再び引上ぐ

宗教的天啓としての科學

吾人は宗教が進化して高尚なる階段の榮光、壯大なる位置に達する前に當りて不信の境を過ぎらざるべからず、將た宗教虚空の野を横らざるを得ざるを知る。

眞理を誠實に愛する結果として起りたる不信懷疑は、之を非宗教的と見做す勿れ。如何なる人と雖も自身の見解を建て、其確信に忠實なる者は、宗教的人間なりと謂ふべし。箴言に曰く、神は義人の爲に健全なる智慧を置けりと。神聖なる者は、よし一度は誤るとも、終には直き道を發見すべし。

眞理は皆神聖なるを記憶せよ、又科學と宗教との衝突を調和すべき端緒の來れるをも念へよ、科學には宗教上の意義ありて神聖なり。去れど從來の僧侶も科學者も未だ科學的に認識せざりき。

實に科學は昔日の信條を破壊せん爲め來れり、科學は盲目的信仰を執らず、將に文字上の眞理を排斥す、然りと雖も深刻に觀察せば忽ちに見

るべし、何等の害惡も行はれざるを、何となれば科學は宗教の精神を保存し、眞理を含有すればなり。

宗教的眞理が寓意的に表現せられたるは、吾人の能く知る所なり、基督は寓意を以て語り、又使徒保羅は哥林多前書三章二節に言へるあり、われ爾曹に乳を哺しみて堅き者を與へざりき、食ふ事能はざればなり、今も尙能はず

保羅今日尙存しなば彼は『今も尙能はず』と言はむ。

彼又希伯來人に贈りて曰く、

凡そ乳を用ゆる者は赤子なれば義につける教に熟せず。

所謂教理なるものは、眞理を形容的に表現したる者なりといふを疑ふ者何處にかある、然らば何故に吾人は此眞理の必要なる所を捕へざる乎。嗚呼是を捕ふ者至つて稀なり、所謂固信家なる者は、其譬喩に感溺して、其譬喩を文字上より信ぜざる者を指して異端者とはいふ也。

科 學 的 宗 教

宗教的眞理にして、寓意的に表現せられたるを神話と稱す、而して其神話其物が眞理なりと思ふのみにて、意味ある譬喩として考へざる信徒は即ち鄙教者なり。於是予輩は斷言せん、正理なる科學と神聖なる宗教との間には、何等の衝突もなし、其衝突あるが如く見ゆるは、科學と鄙教との間に起るものに外ならず。

文字上嚴密に言へば宗教上の比喩は、多少不合理なりと見ゆべし。拉典の格言に云へるが如く、凡ての比喩は跛行すと、實に誤謬あり。

吾人をして忘れしむる勿れ、宗教上の教は眞理を言はむとすれど、尙ほ訥するを、彼等は玻璃を通じて吾人に眞理を指示するものなり。宗教的熱望の言表は理性的、即ち科學的智見を根據としたるにあらず、數代以前の預言者の直覺的智見の上に根ざすなり。是や善し、去れど、理性的智見を除去すべからず。我等の宗教的情操は吾人の科學的能力を壓制す可かざるなり。

附

録

人間の理性及び聰明なる科學的智力は、此肉體の眼の如くにして、宗教的情操は觸感の如し。觸感は簡單且つ直接にして至つて便なるが如きも、去りて視覺は棄つべくもあらざるなり。

或説教者教へて曰はく、吾等は宗教的感情にのみ信依して、科學の視覺を信ず可からずと。噫、爾盲者を導く盲者よ、汝は目若し悪しければ全身暗きの理を知らざる乎。地を這ふ蝸牛は必然的に觸官に依らざるを得ず、去れど高等なる可能性を有し、複雑なる存在をなす人類は、眼の光なくしては確固として歩む能はず。爾ち自由討究者の敵よ、汝は漂泊ひ歩きて平坦なる道を發見し、是れ家路に行く道路ならんと感ずる盲者の如し、見るに眼なきが故に彼は知らず、己れ線路内を歩みつゝ、臆て進行する瀛車の爲めに悲しき終を遂ぐるとを。

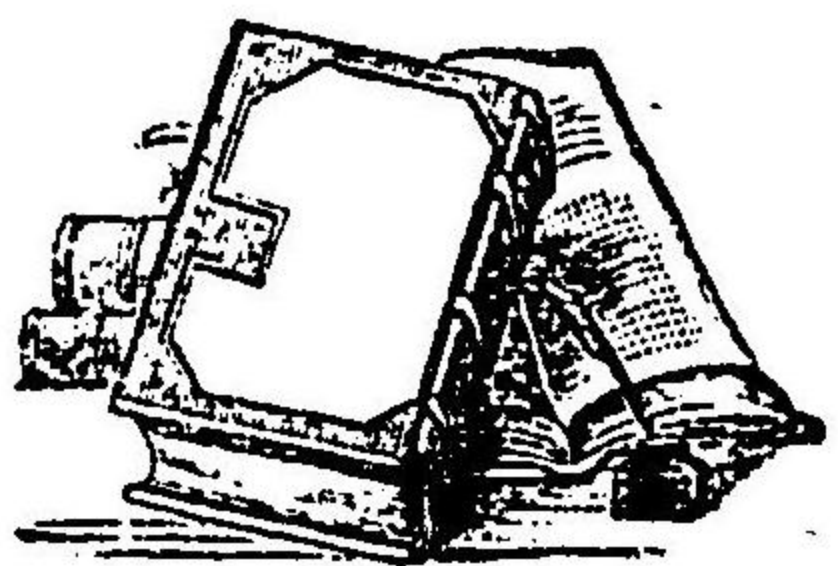
宗教上の概念にして科學を排除せんとする者あらば、それは正しく有罪の宣告を受くべし。斯る概念は所詮生存する能はずして、臆て文物の進



歩に反して消滅すべし、去れど宗教なる者は決して滅びざるなり。人は宗教を保たざるを得ざるなり、何となれば宗教は道德の根據なり、夫れ然り人は宗教なくして生存する能はざりき。人の人たるは道德法則に従ふにあり、道德を沒せば人の位置は下り、道德を進歩せしむれば人の品位は高まる。今や、道德的行爲の標準は世の實在にあらずと言ふもの、夫れ誰れぞ、科學的眞理の宗教を誤れりと言ふもの、何處にかある。事實已に明らかなり、然るに尙ほ事實の面前に於て此等を拒むもの、那邊にかある。宗教は變化することあるべし、されど消滅する能はず、宗教は自身を鄙敎より洗滌して愈々發達生長す可し。宗教は又其名を失ふことあるべし、何となれば頑固なる敎理家は宗教なるものを自身の誤りたる見解と同一視し、而も其誤解を人類に注入するに當りて成功すべければなり。吾曹は斯る場合に當りては宗教なる名を沒して眞宗教に別名を與ふるに吝ならざるなり。故に宗教の本體は存すべし。宗教は人類

の熱望の精髓なり。吾等の最も神聖なる確信を實際的生活に應用したる者なり。宗教も科學も共に破る能はず。科學は眞理を追求するの道にして、宗教は眞理に依りて生活を送らむとする熱心及び善意なればなり。

附錄 宗教的天啓としての科學終



明治卅二年十二月十四日印刷  
同卅二年十二月十八日發行

科學的宗教

定價三十錢



譯者 長谷川誠也

東京市神田區鈴木町十二番地

發行者 今村金治郎

東京市芝區露月町十八番地

印刷者 山本鏌次郎

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

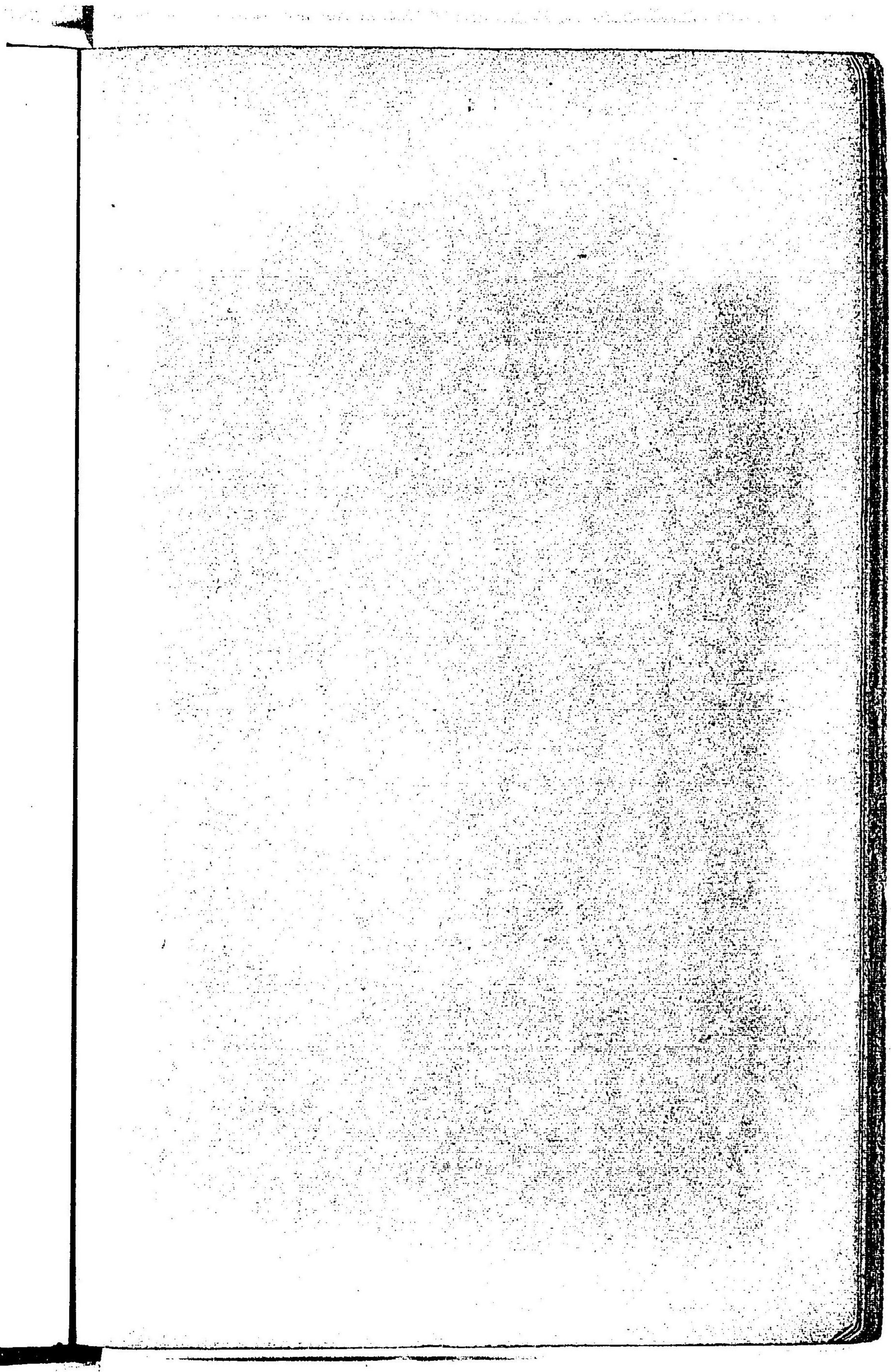
印刷所 株式會社 秀英舍

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

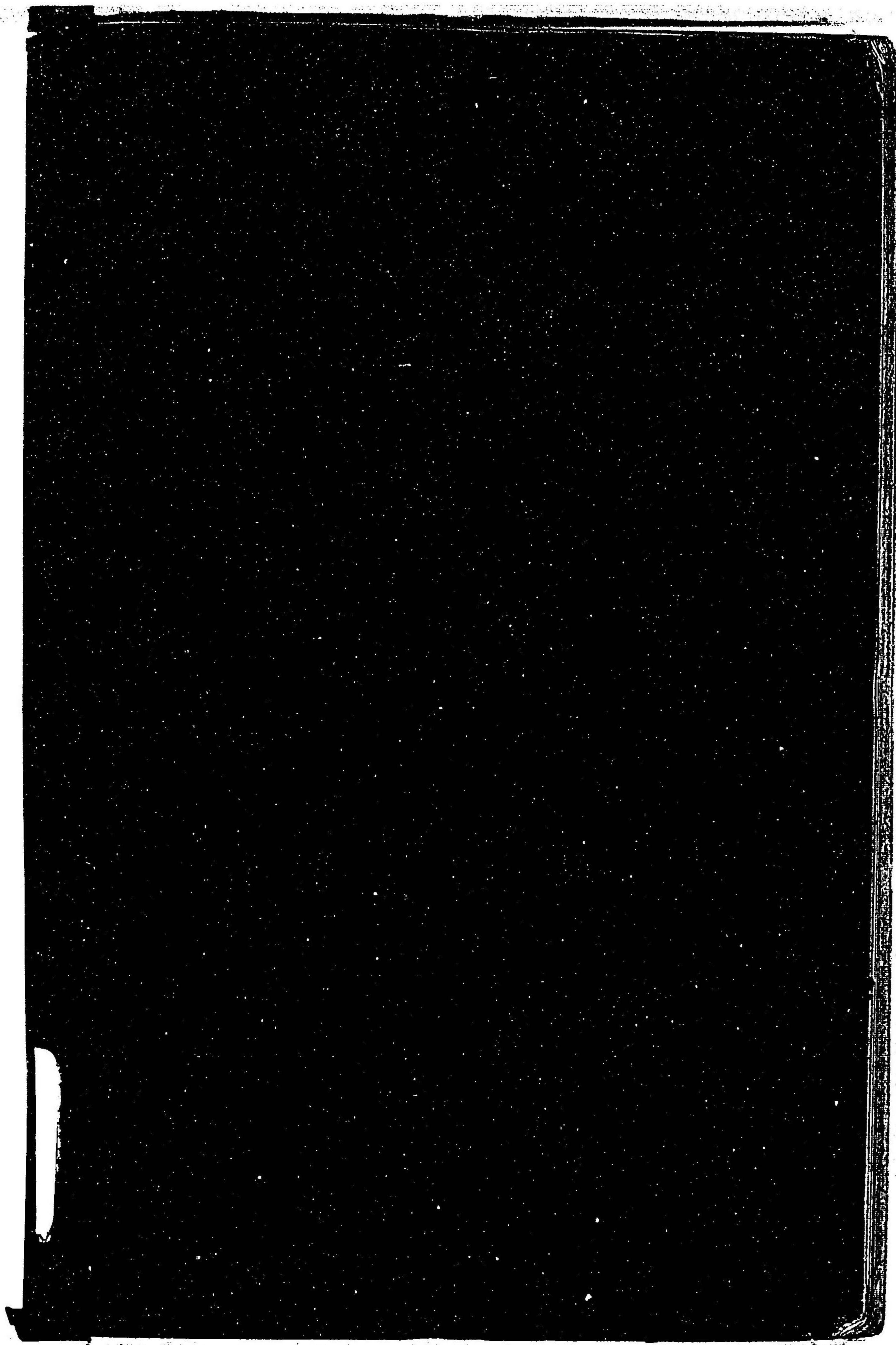
發行所

東京市芝區露月町十八番地

鴻盟社



85
94



013555-000-2

85-94

科学的宗教

パウルケーラス/著

M32

ABA-0017



